



图 107 調査区中央 周辺遺構平面

深さ約1.0 mを測る（図103）。埋土のほとんどが水成の堆積であることから、自然に埋没したものと考えられる。遺構肩部の第8層が遺構内に垂下しているが、本例は下層の崩落に伴うものであり、下面の遺構ではないと判断する。井戸の底部からは、水差形土器と壺が各1点、ほぼ完形の状態で出土した（図104、図版272）。壺の口縁には穿孔がみられることから、いずれの土器も紐を付ける等して水汲み用に使用されたものとする。

07055高まりの南側には、広大な水田域の広がっていたことが明らかである（図105）。その中央には蛇行しながら北西へとつづく07011大畦畔が存在する。この大畦畔は第7-2面から踏襲された遺構であり、本遺構面では幅2.0~3.0m、低位の水田面との比高差は約30cmを測る（図106、図版43-1~3）。断面①のように遺構面毎に位置をずらして作り直した痕跡や、断面②のように下面の形状をそのまま踏襲する場所もある。やや歪な平面形を呈しながらも07055高まりに沿ってのびることから、同高まりからの緩斜面を区画するために築かれたことは明らかである。この緩斜面はいわゆる高まりの後背部にあたり、低位部分は湿地状、上位部分は乾燥地化していたと考えられ、それぞれに適した灌漑を行う必要があったのであろう。07011大畦畔の設置により、緩斜面は平坦な上段部とやや傾斜の残る下段部に分けられ、それぞれに適した水田区画がなされている。

07053・07067溝は、07055高まりの南側水田面の上段部に位置する（図105）。幅約0.6 m、深さ約15cmを測り、高まりや水田の主軸に沿ってのびる。溝は水田畦畔を寸断しながら延伸しており、埋土には水田耕作土に類する土砂が流入することから、流水の事実は確認できない。畦越しの水路を掘削したものか、足跡による凹みかは不明である（図106）。

07011大畦畔より北側に位置する上段部の水田は、長軸を07055高まりに平行しながら規則的に配されている。上記溝の断面をみても、やや離れた位置であっても標高は変わらず、平坦な水田面であったことがわかる。一方、大畦畔より南側の下段の水田はやや様相が異なり、全体的には不規則な印象を感じる（図107）。これは数枚程度の水田で構成されたブロックが集合し、さらにブロック間を不定形な水田区画で調整しているためであり、地点毎の微地形に対応した水田の配置と水利がなされたことを示している。下段の水田面は、全体的には南に向かって緩やかに下降するすり鉢状を呈しており、最も高所を巡る大畦畔には上段からの給水を行うための07070・07071等の水口が設けられ（図版46-3）、内部は畦越しや07082等の水口によって配水していたと考えられる。07083畦畔は、下段の水田ブロックを区画する畦畔の1つである（図107）。断面によると第7-2層上面に凸みが看取され、第7-1面埋没時の疑似畦畔ではないことから、配水方法に合わせて畦畔を度々作り変えたことを示すものとする（図108）。07055高まりに沿って北西へと続く07011大畦畔に対し、調査区西半の微高地形に対

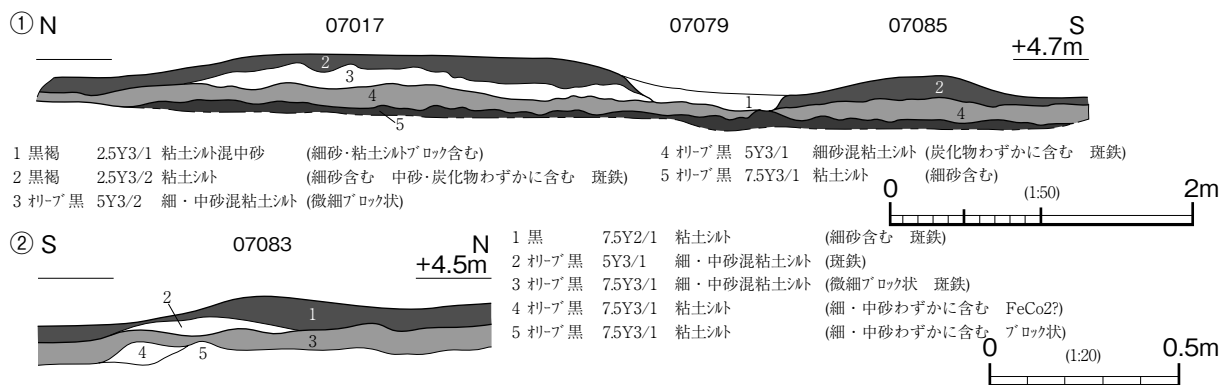


図108 07017大畦畔、07079溝、07083・07085畦畔 断面

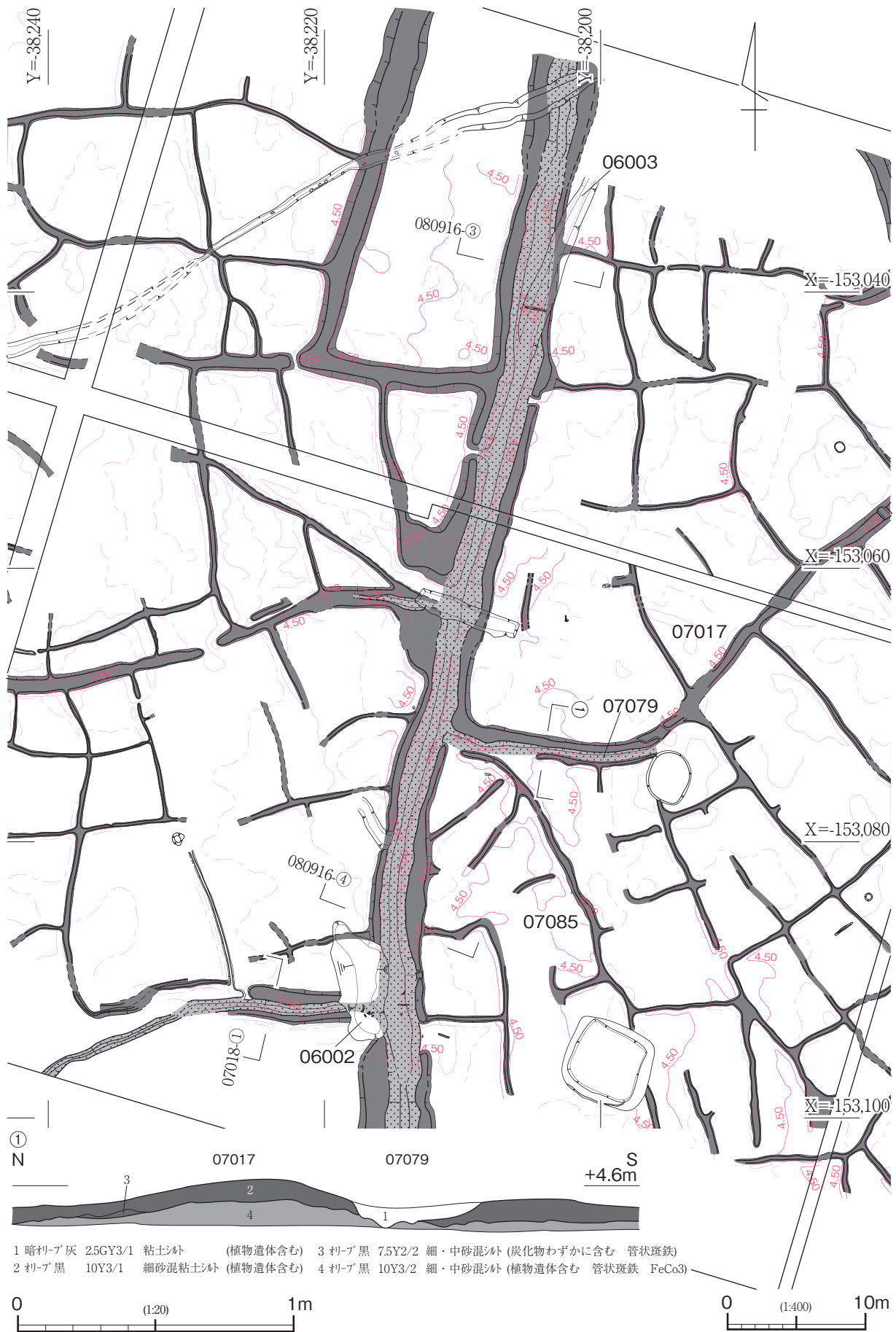


図 109 07017大畦畔、07079溝 平・断面

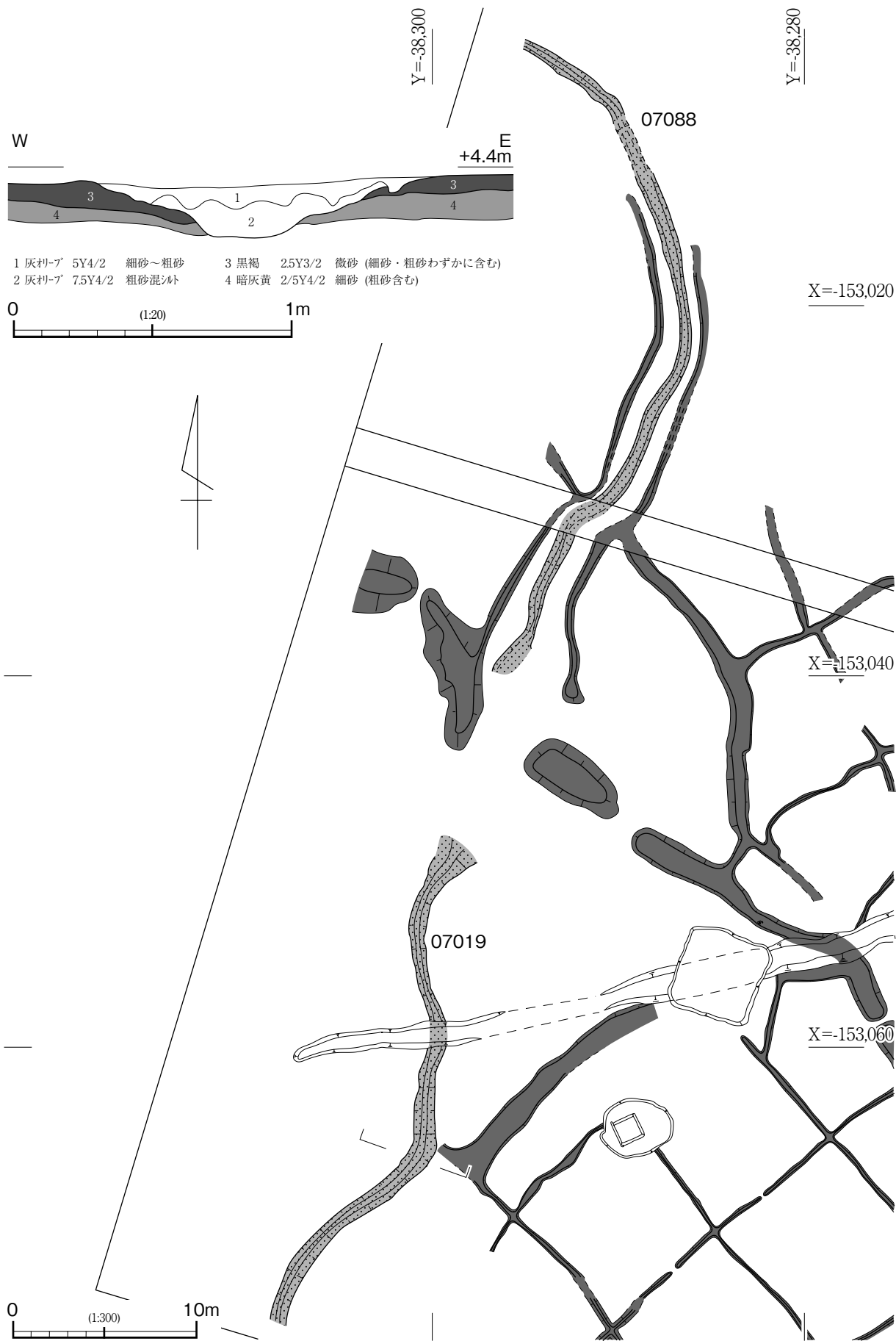
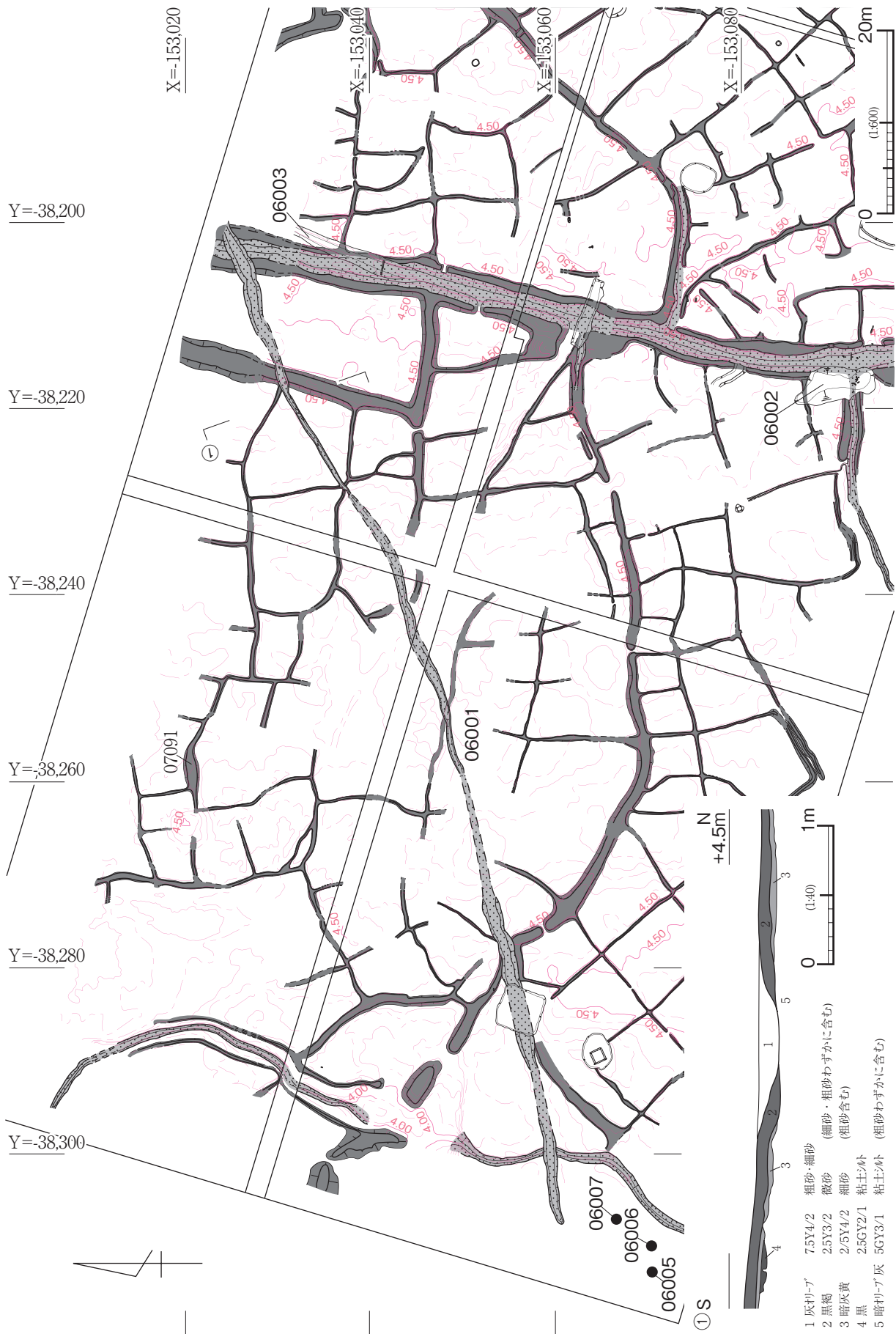


図 110 07019 溝 平・断面



Y=-38,200  
 Y=-38,220  
 Y=-38,240  
 Y=-38,260  
 Y=-38,280  
 Y=-38,300

X=-153,020

図 111 06001 溝 平・断面

応するための大畦畔が蛇行しながら東西方向に築かれている（図87）。07017大畦畔は07011大畦畔から分岐して南西へとのび、080916溝の東側堤に接続する（図107、図版42-5）。堤付近の大畦畔は周辺の中で最も高所となり、標高はT.P.+4.7 mを測る（図108）。したがって上層からの攪乱も著しく、周辺水田の畦畔等も残存状態はあまり良好ではない。07017大畦畔南側の水田は、前述における下段の水田区画に連続するものであり、基本的には少数単位の水田により構成されている。当地区は灌漑用水路から直接の引水が可能であり、080916溝から取水して畦畔沿いに奥の水田まで流す07079溝を検出した（図107）。このような灌漑方法は080916溝の周辺に多く見受けられ、溝の西側に位置する07018溝

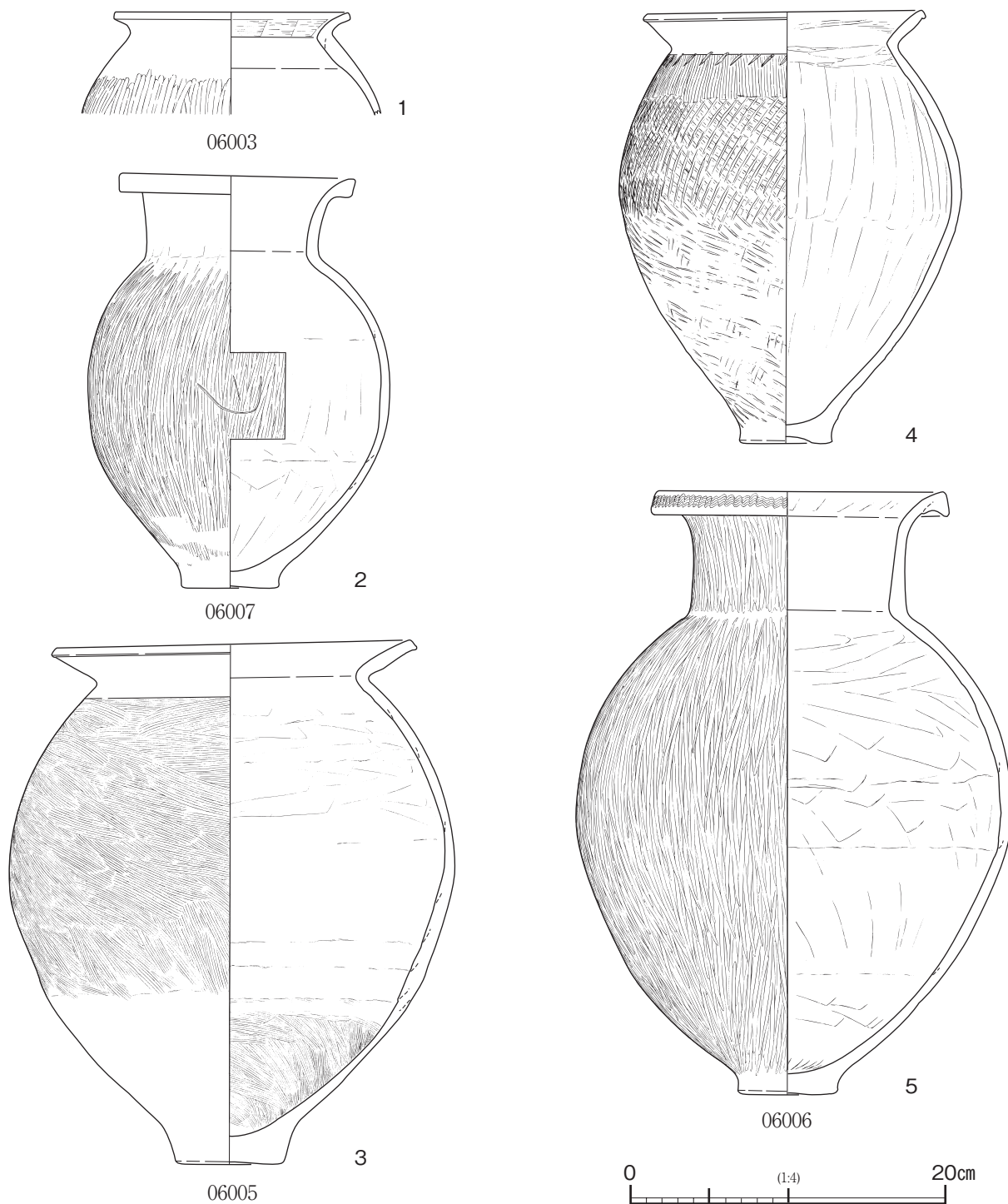


図 112 06003溝、06005～06007土器集積 出土遺物

も同種の水路と考えられる（図109、図版42-6）。080916溝の周辺には下面の微高地の起伏が残存しており、処々に発生する高所の水田区画を通過するために掘削された水路と考えられる。

080916溝は、Y = -38,210付近を南北にのびる水路であり、第8 a 面において掘削されたものを踏襲している（図59・109、図版42-1）。溝内の埋積に際し、そのままの状態で両肩に盛土を行う場合、

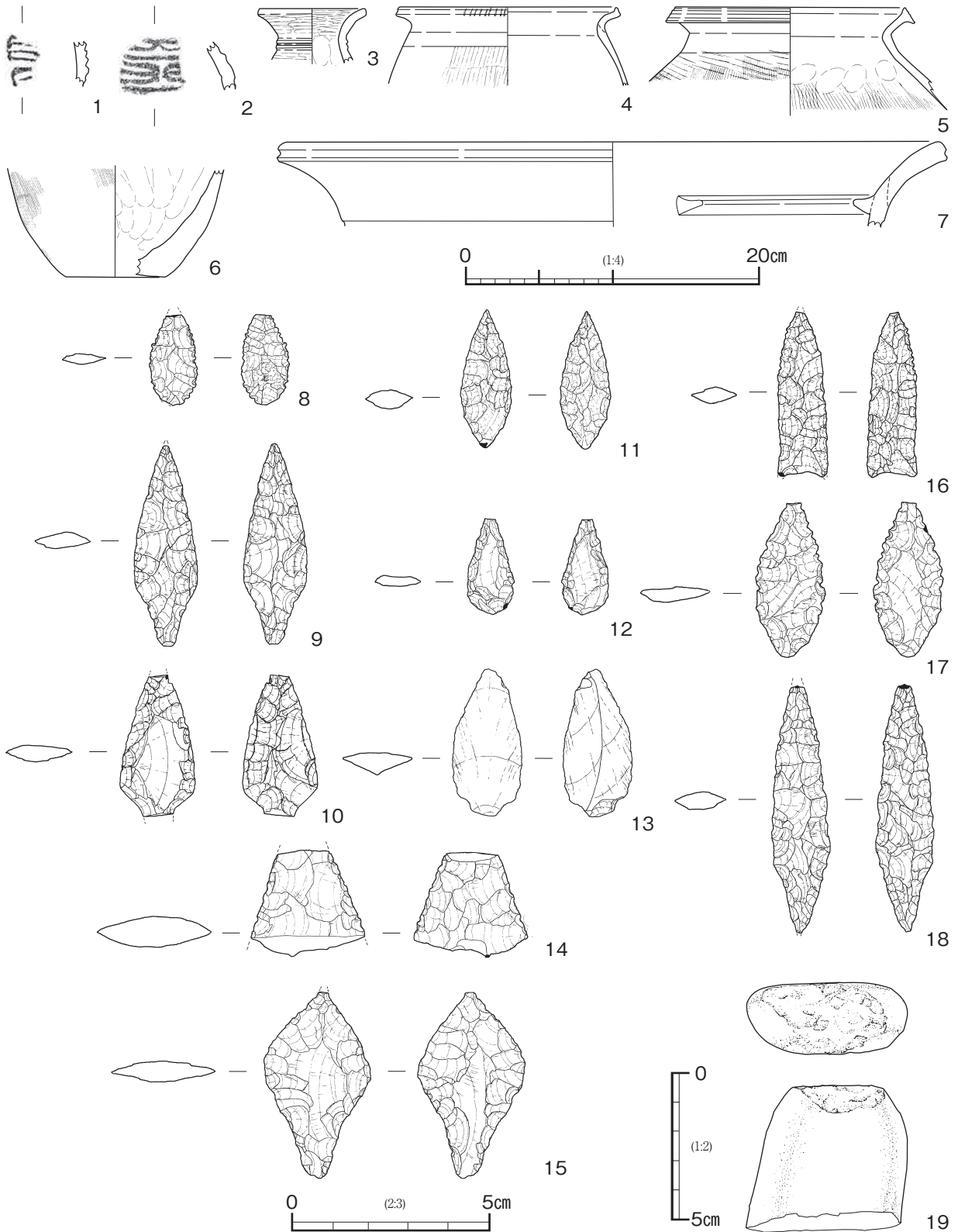


図113 第7-1層 出土遺物

内部を掘削するのみの場合等、状況に応じて改修方法を変更した様子が看取され、当地の灌漑用水路として重要な役割を担っていたことが窺える。同溝より西側の水田については、全体的に耕土の土壌化が顕著ではなく、水田畦畔の検出が困難であった（図87）。中央やや南寄りを大畦畔が、やはり蛇行しながら西へとつづいており、これを挟む南北の両側に水田域が広がる。東側と異なり、080916溝の西側は10数mのうちに50cm程を下降した後、ほぼ平坦な地形がつづき、再び下降して最終的な標高は、T.P.+4.4m前後となる。南北いずれの水田域についても、水田区画は前述のブロック単位の集合で構成されているようであるが、上記の地形に対応した水田区画の配置が行われたようには思えない部分も見受けられる。なお、東西にのびる大畦畔には、処々に水口が設けられていることから、南側の水田域から北側へと配水された可能性が高い。07019・07088溝は調査区の西端を蛇行しながら北へと流れる水路である（図87、図版43-4・46-5）。幅約1.2m、深さ約20cmを測り、埋土には砂土を多く含む。溝の両肩からは堤状に巡らせた畦畔を部分的に検出した。本溝より西側の地形が不明ではあるが、080916溝との比高差が約-1.2mと当水田域においては最も低位を流れる水路であることから、おそらく西側水田域の排水路として機能したと推測する（図110）。

06001溝は、調査区の西側をほぼ一直線に東北東へと流れる流路である（図111、図版47-1）。遺構名が示すとおり、第7-1面に帰属する遺構ではないが、上の第6-2面では完全に埋没して検知できないため、本遺構面にて記載することにした。遺構内には粗砂・細砂のみが埋積しており、それらは第6-2層除去時にレンズ状堆積による盛り上がりが見取された。当初は第6-2層堆積時の一時的な土砂の流入による浸食痕と考えられたが、埋土の除去後、遺構底面から多数の足跡を検出した。おそらく、歩行によってできた凹みに洪水砂が流れ込んだものであろう。

同様の遺構として、調査区中央部に位置する06002破堤や06003溝等が挙げられる（図111）。両遺構とも080916溝の氾濫活動に伴って形成された浸食遺構であり、第6-2面では完全に埋没して新たな地形を形成する基盤となっている。06002破堤は080916溝の南側、07018溝との交点に位置し、周辺の堆積物中には木質遺物が含まれたことから、柵等で耐え切れなくなった水が北西に向かって破堤したものと考えられる（図109、図版42-2・4）。特記すべき点として、木質遺物の中に木製品加工の際に生じたと思われる木屑が多く含まれていた（図版271）。断面は鋭いものの、剥離部分がやや引き裂いた状態に見えることから、石製品による荒加工時のものと推測する。06003溝は080916溝の北側に位置し、北東の水田に向かって破堤した痕跡である（図109、図版48-3）。本流部に木質遺物が出土し、上流側に多数の水口を確認したことから、揚水用の柵等が存在し、これを越流した土砂が破堤した痕跡と推測する。本溝からは弥生時代後期初頭頃の甕が出土した（図112-1、図版272）。この他、先述の07019溝の西側平坦部からは、土器がまとまって出土した（図111）。06005～06007土器集積は、厳密には第6-2層の出土遺物であるが摩耗はほとんどみられず、現地性が高いと判断される（図112-2～5、図版272～274）。上面を含む遺構の状況が不明瞭なため、遺物の性格等は不明であるが、水路際から出土した点を鑑みれば、祭祀目的で置かれた可能性が高いと思われる。

第7-1層の大半が耕土であり、遺物の出土は非常に少ない。また、水田耕作に伴う攪拌を行うために下層の遺物が巻き上げられており、図示し得たものもほとんどが古い時期の遺物である（図113、図版273～275）。1・2は縄文時代晩期の離山式から氷I古式段階の浮線文土器であり、3・7は弥生時代前期の壺片である。5は胎土から吉備産甕の搬入品と考えられ、弥生時代後期初頭に比定できる。出土した石鏃の重量は0.8～5.3gを測り、平均約2.9gとなる。19は和泉砂岩製の摺石である。



Y=-38,050

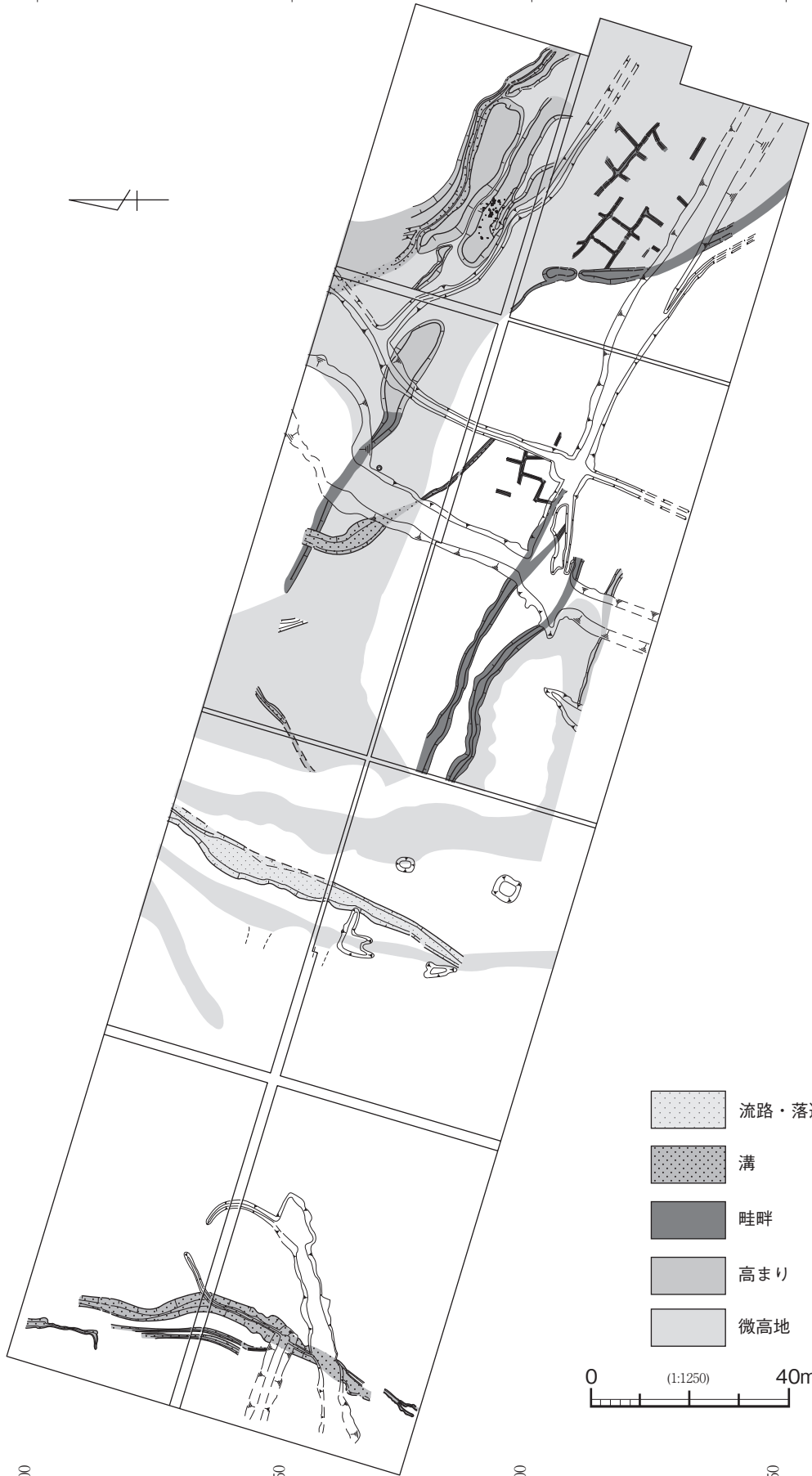
Y=-38,100

Y=-38,150

Y=-38,200

Y=-38,250

Y=-38,300



X=-153,000

X=-153,050

X=-153,100

X=-153,150

0 (1:1250) 40m

图 114 第 6 - 2 面 遺構分布

## 第4節 第6面

### 1. 概要

第7面では弥生時代前期以降の著しい水田開発に伴い、調査区一帯は広大な生産域へと変貌した。弥生時代中期後半頃に完成されたと思われる水田遺構を概観すると、当地域における水田耕作の仕組みが成熟した段階にあったことがわかる。しかし、このようにして築かれた水田遺構も、弥生時代中期末から後期初頭以降、急激に衰退していく。第6面では、それまでにみられたような一面に広がる水田遺構は消失し、当地区における生産機能が次第に失われていく様子を窺える。

第6層は調査区のほぼ全域において確認できる（付図1）。同層は土壌化層を基準に上下2層に分けられ、上を第6-1層、下を第6-2層と呼称する。いずれの層も、場所によって堆積の異なる状況が看取される。第6面の地形は、総体としては第7面との間に大きな違いは認められない。しかし、低所を中心に氾濫堆積物が幾度か流入したことにより、地形の底上げが成され、全体的には平坦化が進む。

第7面において水田域の広がる低地部では、第6-2層の基盤層である第6-2b層が一様に検出され、地形的に低い場所ほど厚く堆積する傾向が認められる。特に低地部では堆積物の粒径が中礫程度に達する場合もあり、激しい流速を伴う氾濫が発生したことを物語っている。これにより、調査区西半の標高は平均30cmほど高くなっており、最も変化の大きい調査区の西端では1.0m以上も上昇している。当該区における第6-2層の土壌化はあまり顕著ではなく、層中には、攪拌によって層状に堆積していた植物遺体の細片化した炭化物が散見される。一方、調査区北東部を中心とする微高地形の周辺では第6-2b層は遺存せず、第7-1層直上に第6-2層が形成される。同地域では第6-2層の土壌化は進行しており、一部に下層を取り込んだ様子も見られることから、第7-1面において検出した水田畦畔のうち、部分的に本遺構面の疑似畦畔が含まれていた可能性も考えられる。

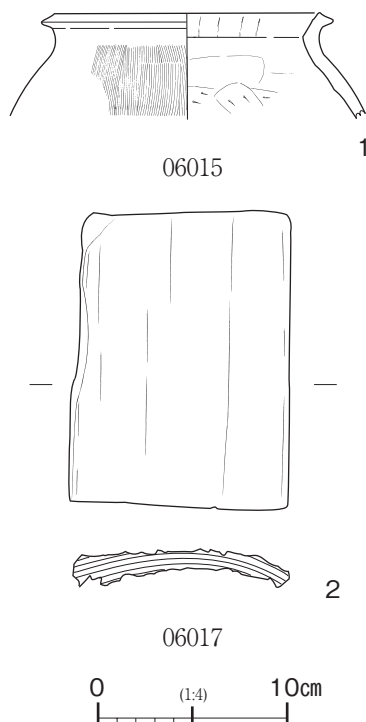


図115 06015大畦畔、  
06017流路 出土遺物

第6-1層では、調査区の大半において第6-1b層は検出されず、第6-2層直上に重なる様子を確認した。ただし、調査区東半の中央付近にのみ泥質の自然堆積層を検出し、下面の水田域に部分的に流入したものと考えられる。全体的に土壌化は顕著であるものの、攪拌の痕跡が弱く、水田耕作を行っていた可能性は低いと考える。

### 2. 第6-2面の遺構と遺物

第6-2面において検出した遺構としては、微高地・高まり・水田・溝が挙げられる（図114）。概要において記したとおり、第6-2面における遺構の数は激減する。しかし、花粉や植物珪酸体分析を行った結果、本遺構面においても下面に続いて水田耕作を盛んに行っていた可能性が高いことは明らかである。認知し得る水田遺構は少ないものの、調査区北東部の07055高まりの南側の地形的にやや高い場所を中心に、水田畦畔や07011・07015大畦畔等を検出した。また、調査区中央付近では、南側において並行しながら東西にのびる06017流路を検出した。前者は水路等に伴う堤と推測されるが、詳細は不明である。出土遺物

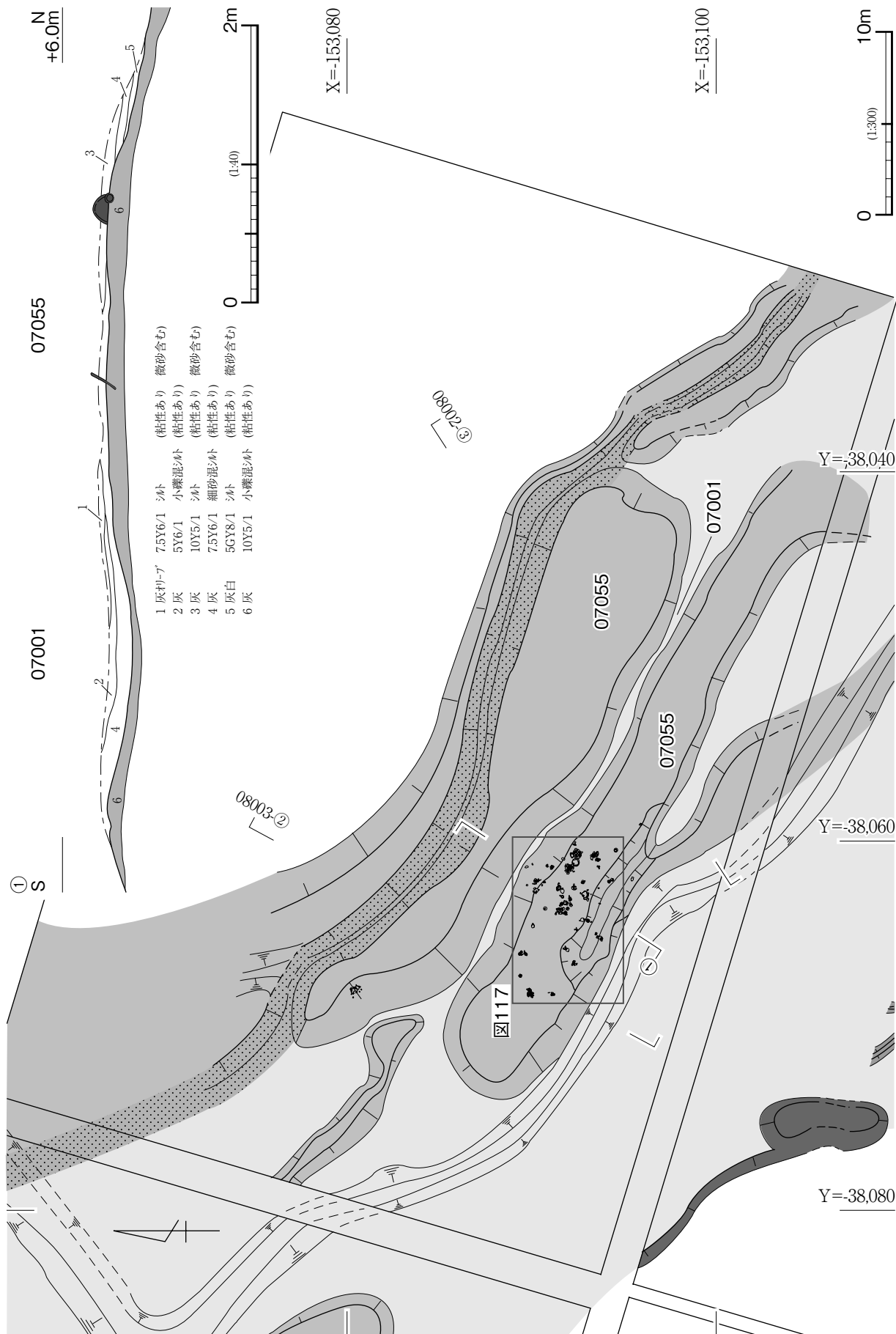


図 116 07001溝、07055高まり 平・断面

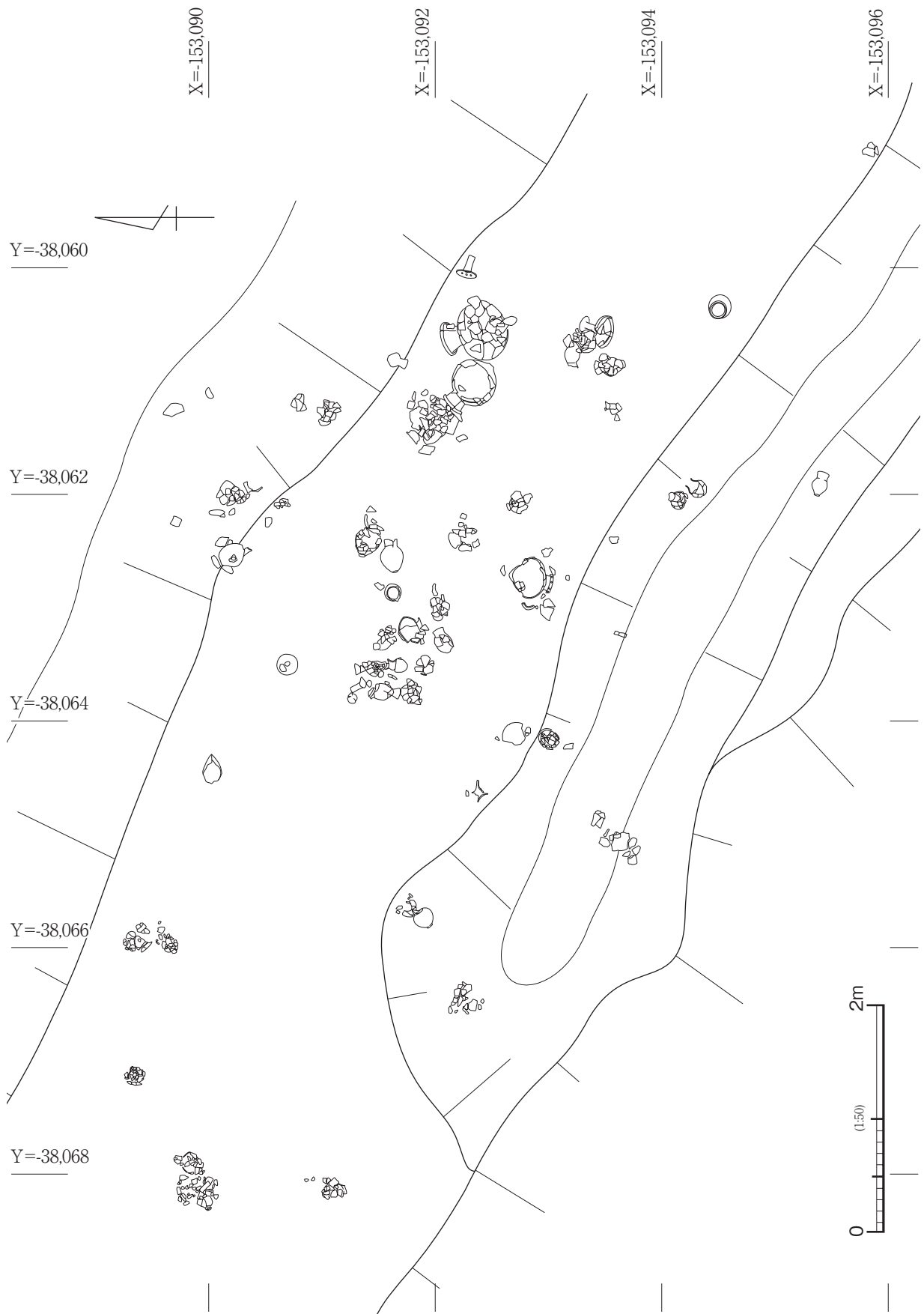


図 117 07055 高まり 遺物出土状況

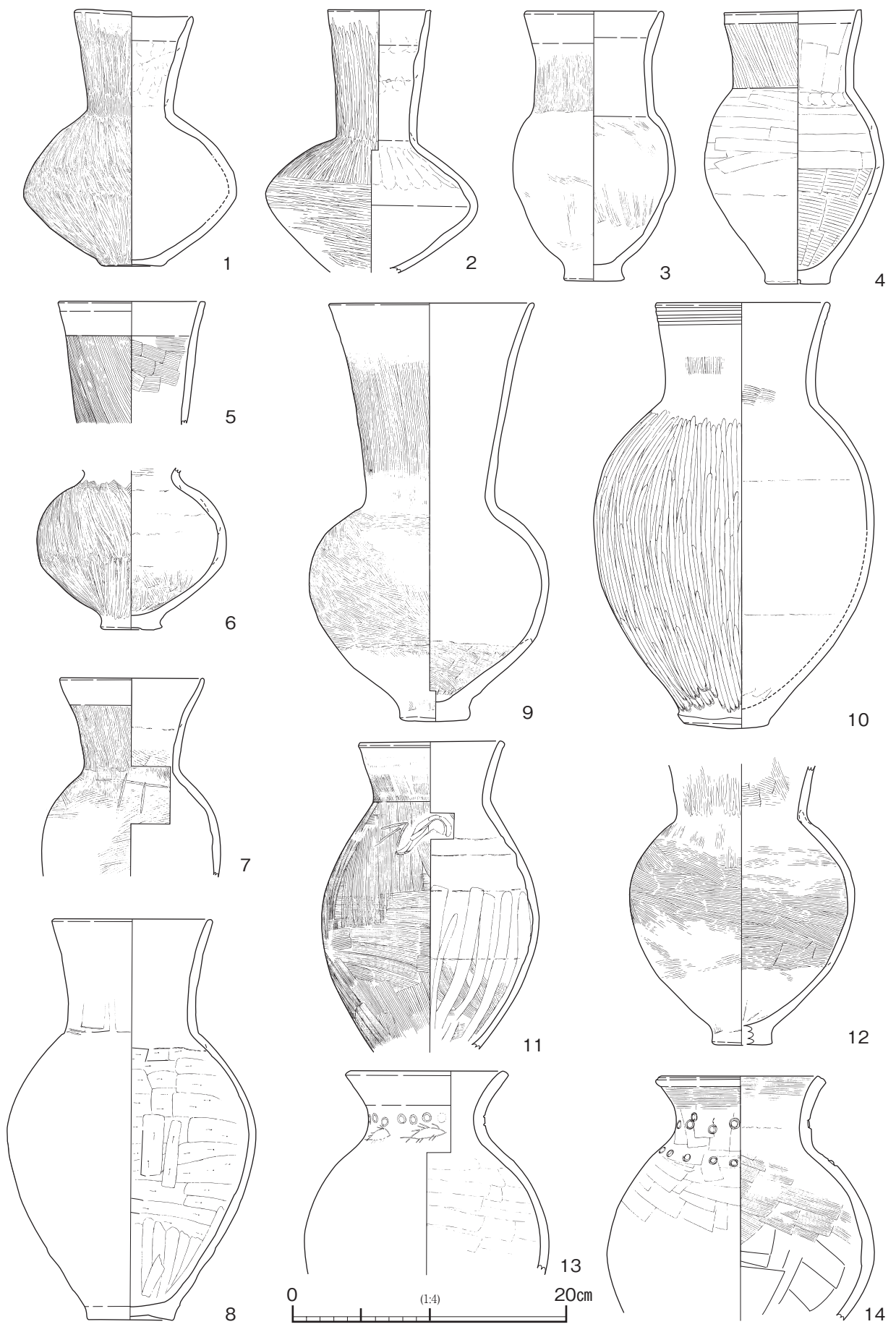


图 118 07055 高まり 出土遺物 (1)

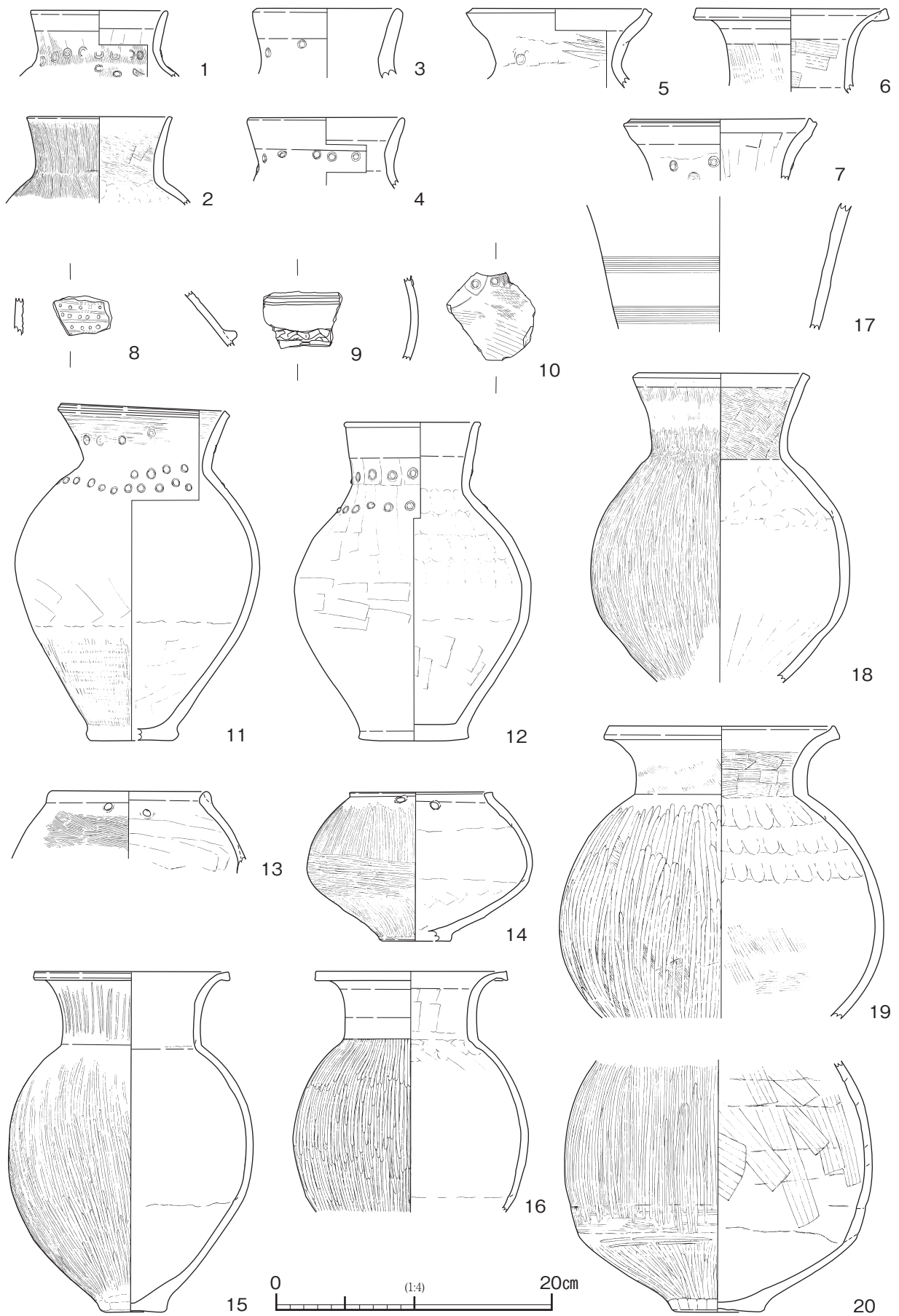


図119 07055 高まり 出土遺物 (2)

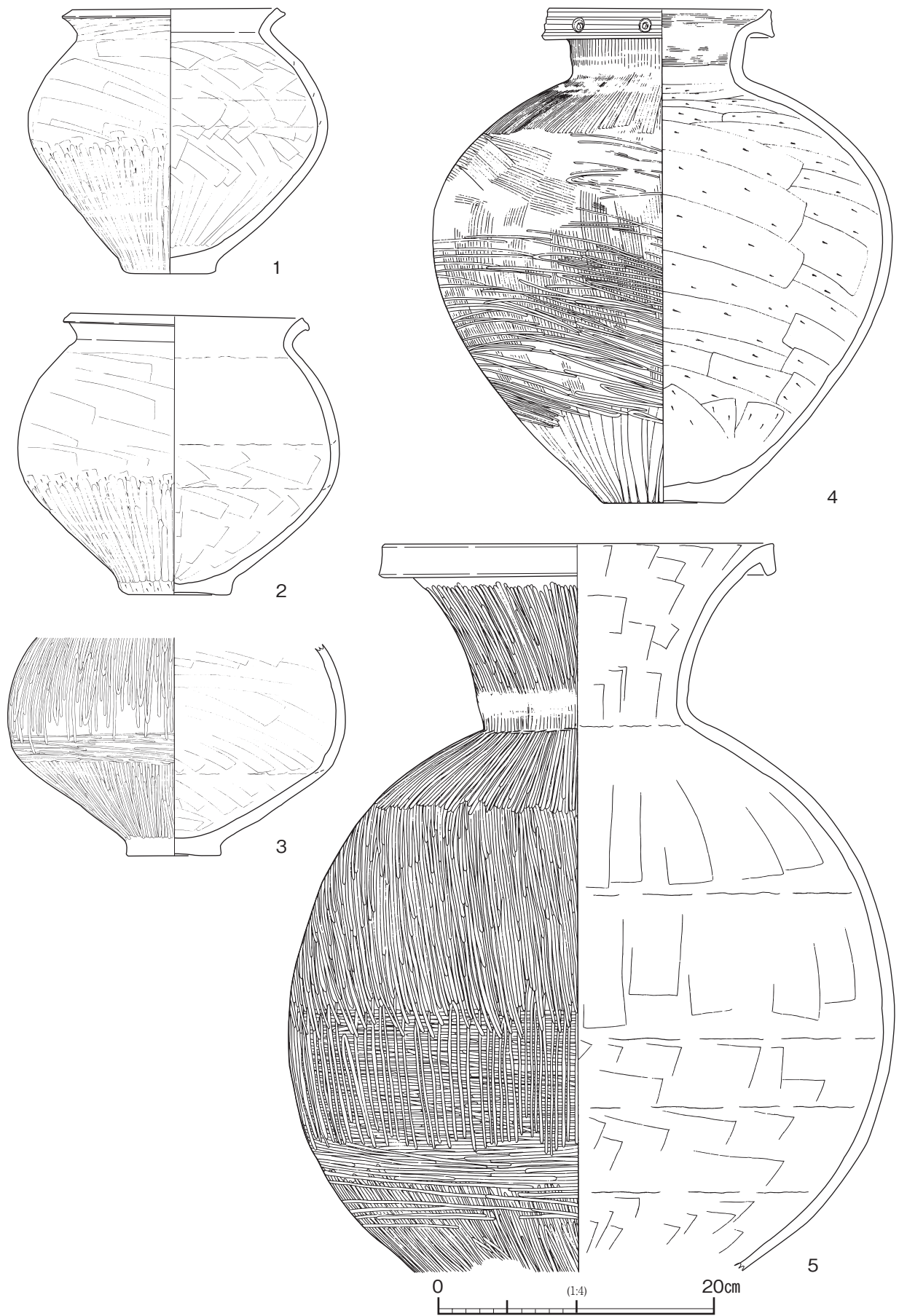


図120 07055 高まり 出土遺物 (3)

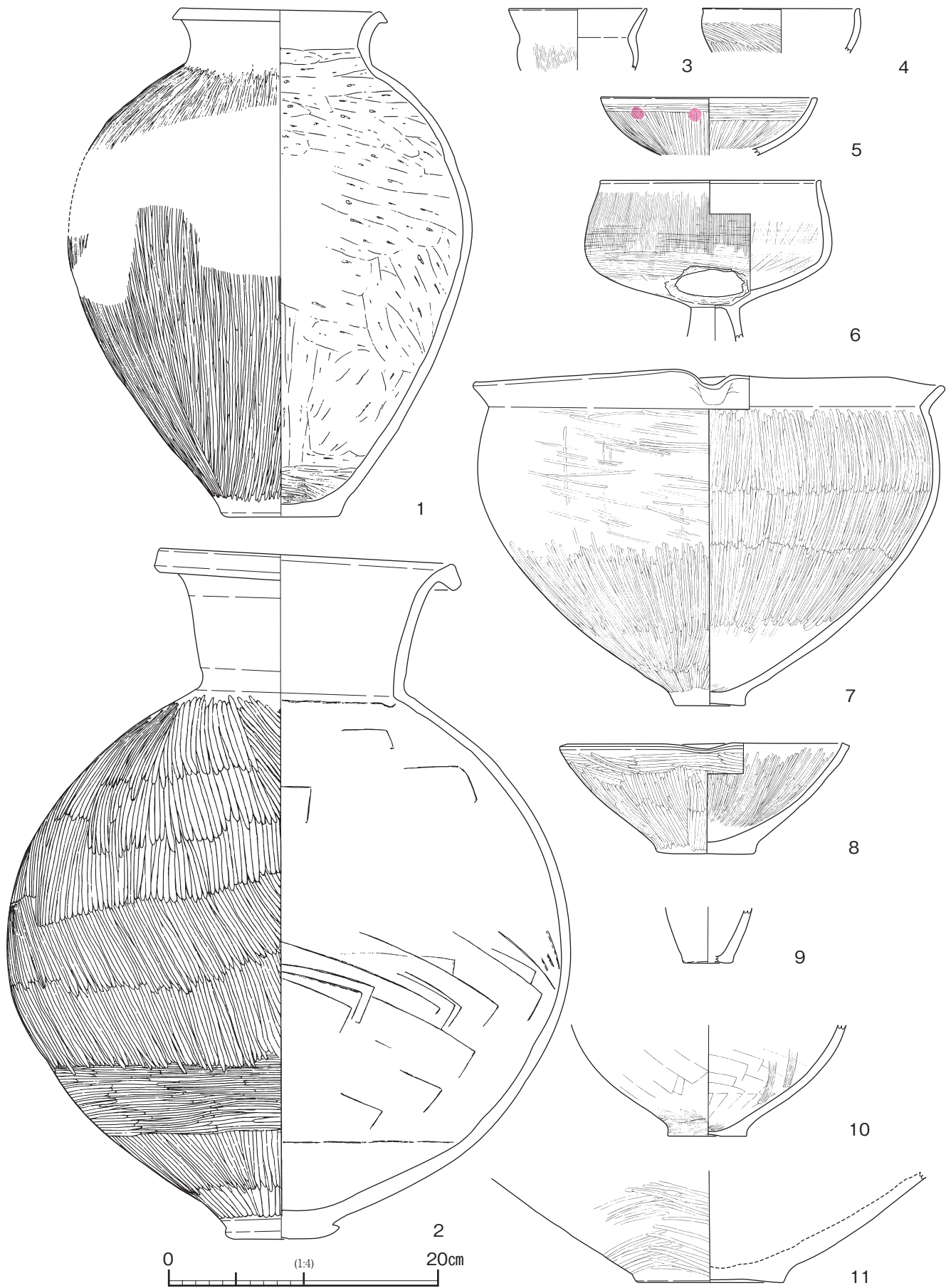


图 121 07055 高まり 出土遺物 (4)



から（図版50-2）、これらの遺構は概ね弥生時代後期前半に比定できる（図115、図版276）。本遺構面において特筆すべき成果として挙げられるものは、07055高まり上から出土した土器群である。土器群は07001落込の南側、07055高まり南部の上面における東西約9.0m、南北約6.0mの範囲に散乱する（図117、図版50-3）。大半の土器が、高まり上に土壌化する第6-2層に部分的に埋もれた状態で出土したことから、本遺構面の廃絶より若干先行するものと考えられる。土器群が形成される時点は、すでに07001溝は埋没して落込と化し、高まり上は北側の07002溝のみが機能していた。土器群の南東に新たな落込が現れるものの、これは浸食等による自然地形と考えられる。土器は、高まり以外に南北両側の落込からも出土するが、本来は幅2.5~4.0mの高まり上に置かれていたものの一部が、時間の経過と共に転落したと推測される（図116）。出土状況によると、破碎した土器が多く見受けられるものの、ほとんどは現位置を保っていると思われ、完形のまま出土した土器も数多くみられた。

土器は図示したもので総数75点を数え、混入品を除いた内訳は、壺38点、無頸壺2点、鉢5点、台付鉢5点、高杯5点、器台2点、甕10点、台付甕3点、不明1点である（図118~123、図版276~



図122 07055高まり 出土遺物（5）

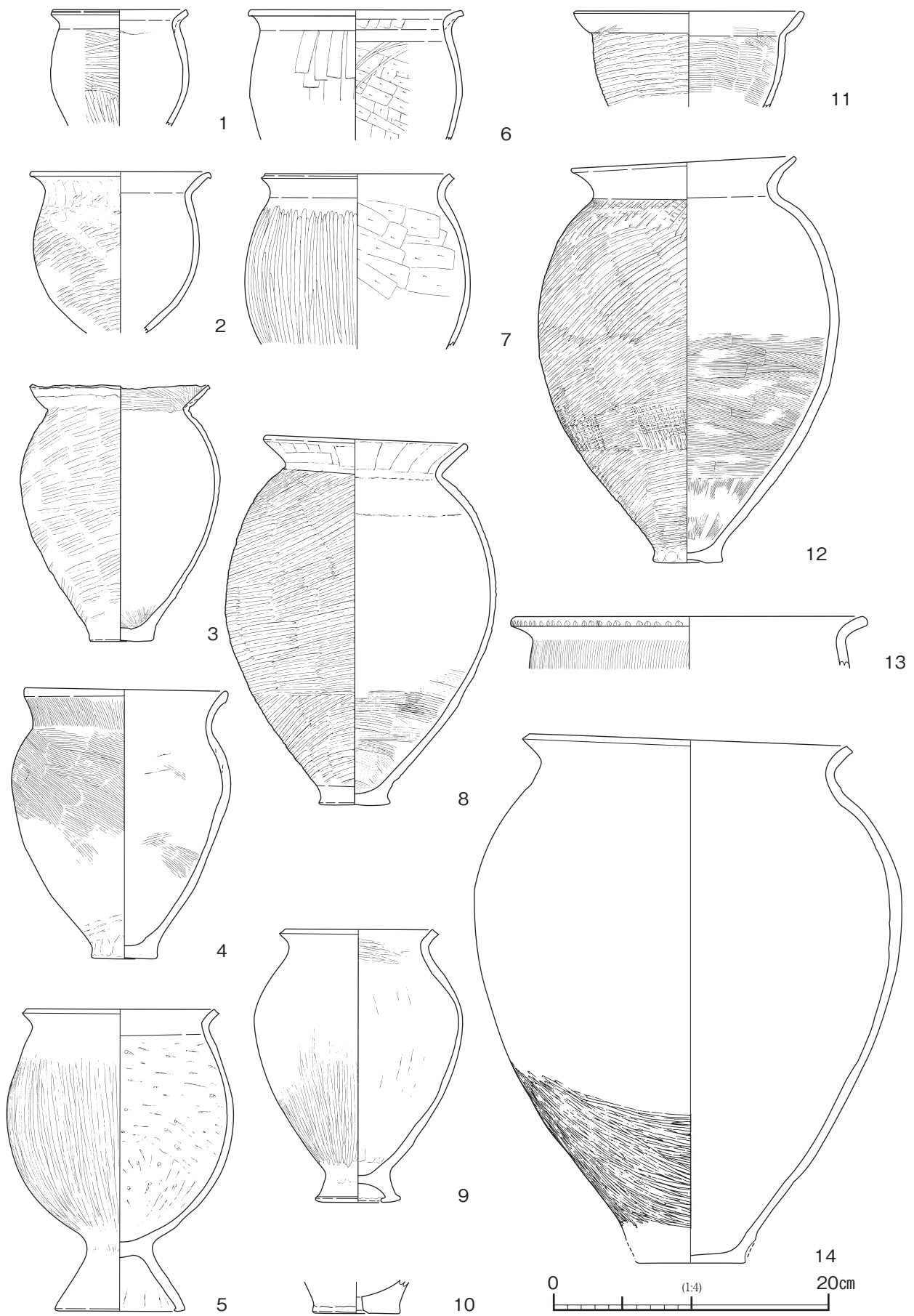


図123 07055 高まり 出土遺物 (6)

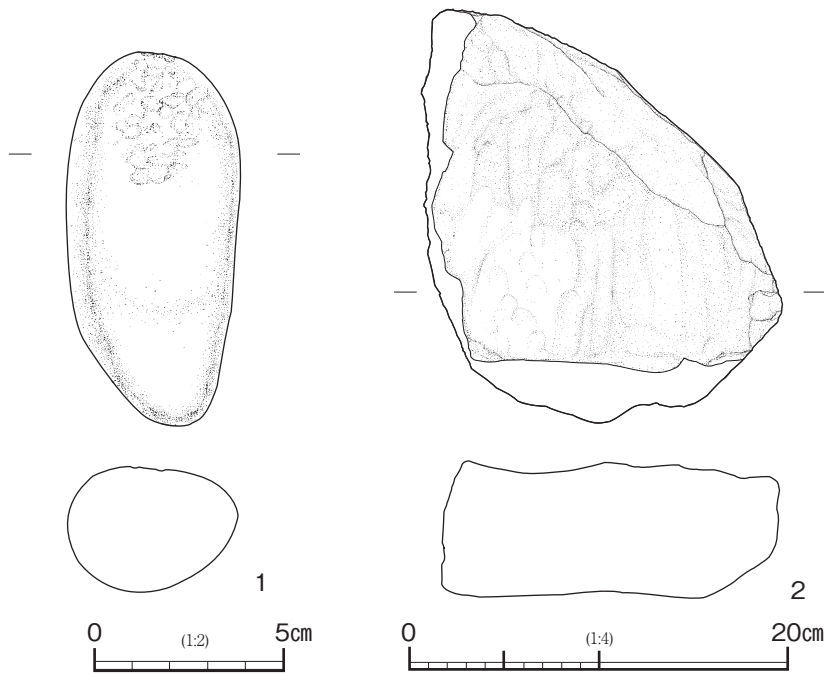


図124 07055高まり 出土遺物(7)

289)。原資料は他の包含層が混在するため、破片を含む正確な構成比は不明であるが、概観する限り、圧倒的に壺類の割合が高いことは明らかである。壺は体部が砲弾形を呈し、口縁が直線的かわずかに外反しながら開く型式が最も多くみられる。これに細頸壺・長頸壺・広口壺・短頸壺・無頸壺が加わって全体を構成する。前者は多様性に富んでいるが、生駒西麓産の胎土を持つものは皆無に近い。図118-7は肩部にヘラ記号、同11はヘラ記号と粘土紐の貼付を行う。図118-13・14、図119-1・3・4・7・11・12のように肩部から頸部にかけて竹管文を施すものが最も多く、その中の図118-13は竹管文の下に魚の絵画文を一周巡らせる。魚はヘラ描きによるもので、レンズ形の体部に背びれ・胸びれ・腹びれを表現する。一部、背びれが前後に分かれたように見えるものもあり、マス科を描いたものかもしれない。図119-10は破片ではあるが、竹管文を囲むようにヘラで描かれた文様がみられる。図119-13・14の無頸壺の口縁部には紐孔が穿たれており、本来は蓋が組み合わされていたようである。図120-4・5、図121-1・2は大型の壺であるが、いずれも生駒西麓産の胎土を使用する。図121-5、図122-1は椀形高杯の杯部片と思われ、いずれも外面に赤彩を行う。前者は等間隔に円形の文様を巡らせるが、後者は不鮮明である。図121-6は鉢状の杯部底面に、焼成後、直径約5.0cmの穿孔を行う。土器群の中で穿孔を行う土器は他にみられない。高杯は全体に対する椀形の比率が高く感じられる。その他では柱状脚の型式がほとんどであり、図123-10のような赤彩を施すものもある。甕は調整がミガキ・ハケのものより、粗い叩目を施すものが多くなる。図123-13は弥生時代前期の甕であり、下層遺物を巻き上げたものであろう。図122-2、図123-5・9は台付甕である。生駒西麓産の胎土を使用していることから、東海産の土器等を模倣したものであろう。この他には、摺石や石皿片等の石製品も出土している(図124、図版289)。

第6-2層の大半が耕土であるためか、層内から遺物はあまり出土していない。しかし、湿潤な環境のおかげで木製品が良好に残存していた(図125・126、図版290~292)。図125-7は三稜鏃であり、第6-2層の旧地表面に鉛直に突き刺さった状態で出土した。試料採取が困難なため樹種は不明であるが、色白で緻密な材を使用する。鏃身としては完形であり、茎部付根には矢柄装着用の樹皮が残存する。図125-8は切れ込みのある曲柄又鏃、図126-1は曲柄平鏃である。同平鏃や図125-6の不明木製品には炭化部分があり、焼損したものと思われる。図125-9は不明木製品である。クヌギを板目に使用し、上部を板状、下部を柄状に加工する。裏面の大半と先端を欠損しており、詳細は不明である。この他、完形の木製織機具や尖頭器片が出土する。第6-2層出土土器は弥生時代後期前半に位置付けられ、前述の07055高まり土器群と合わせ、本遺構面の時期は比定できる。

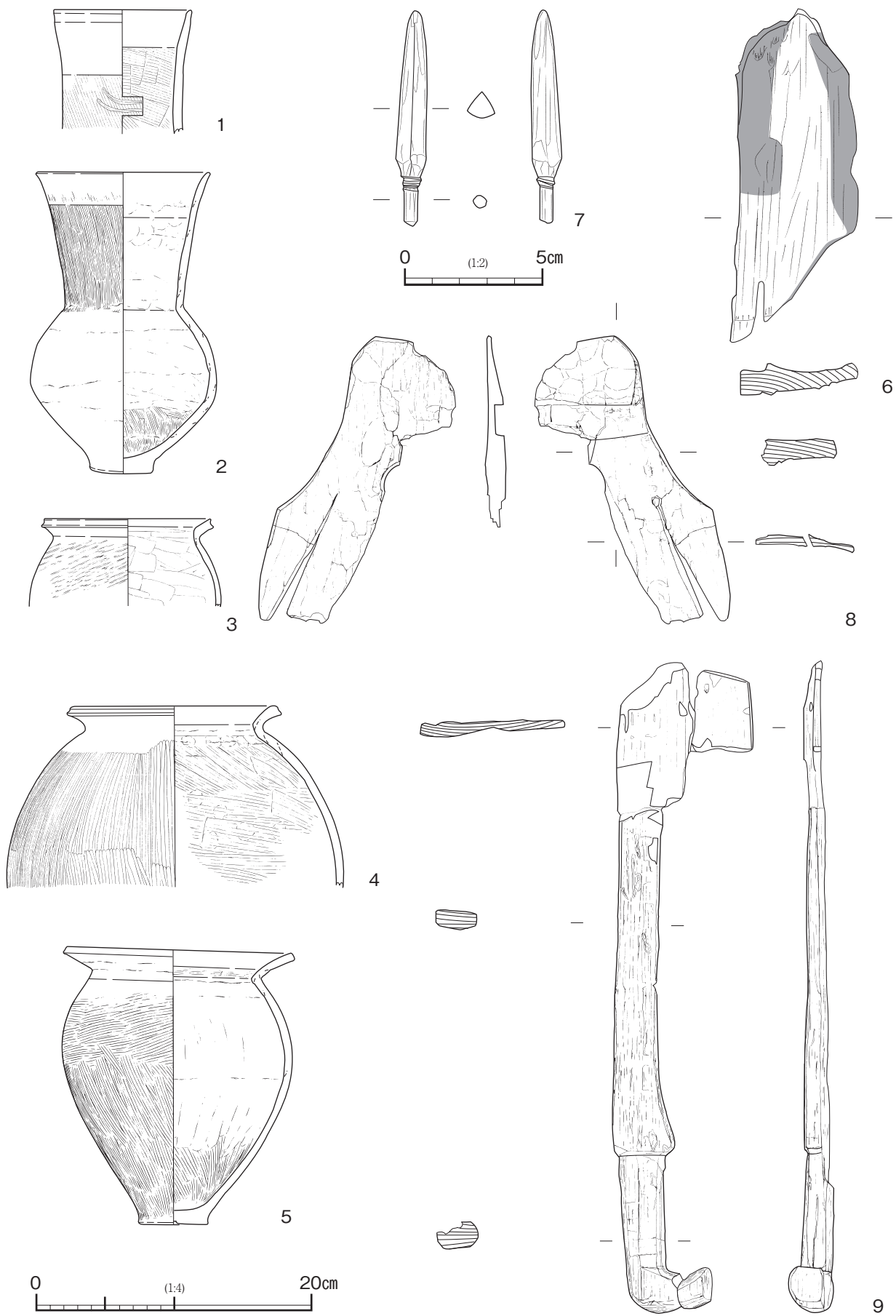


图 125 第 6-2 层 出土遗物 (1)

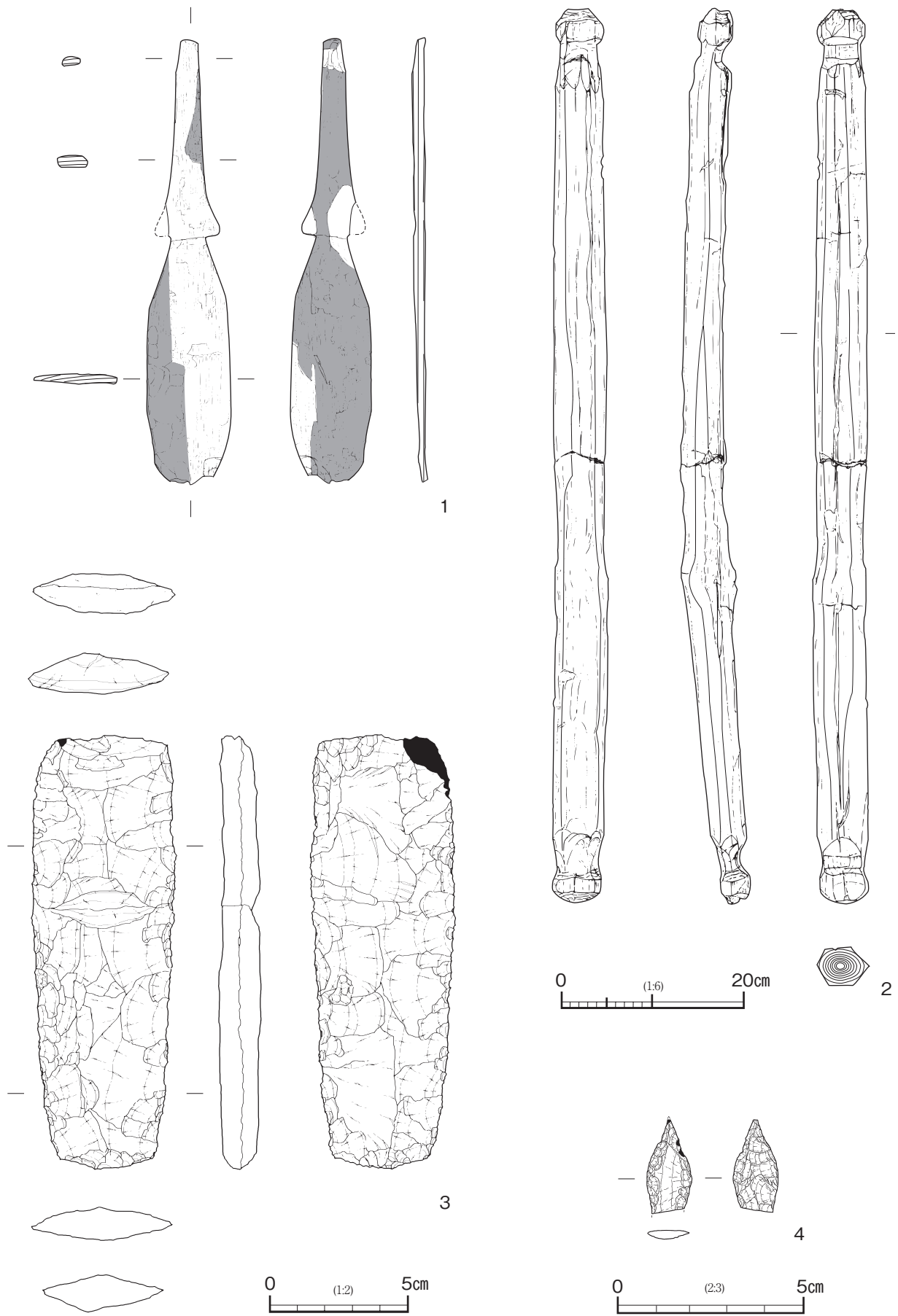


图 126 第 6-2 层 出土遗物 (2)

Y=-38,050

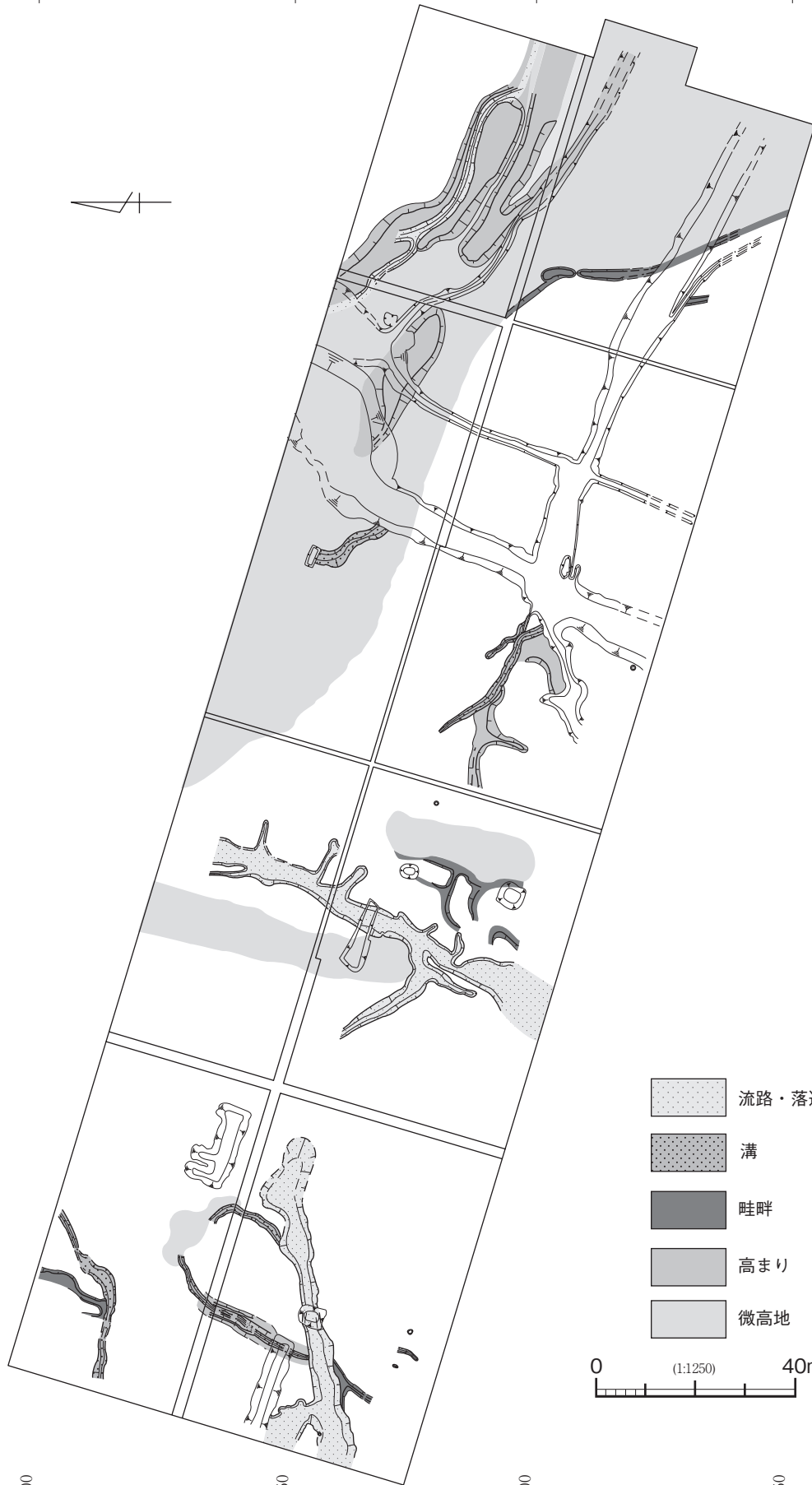
Y=-38,100

Y=-38,150

Y=-38,200

Y=-38,250

Y=-38,300



0 (1:1250) 40m

X=-153,000

X=-153,050

X=-153,100

X=-153,150

图 127 第 6-1 面 遺構分布

### 3. 第6-1面の遺構と遺物

第6-1面において検出した遺構は、微高地・高まり・溝・落込み・ピットが挙げられる(図127)。しかし、検出した遺構の多くは自然遺構と考えられ、遺物等もほとんど出土していない。第6-2面では水田遺構を検出できた調査区東側においても、本遺構面ではそれらを確認することはできなかった。

土層断面によると、Y=-38,130以東には水田面を覆う第6-1b層シルトが堆積しており、わずかに残っていた水田域も埋没したものである。前項において第6-2層は土壌化が進んでいるとしたものの、これは植物遺体の腐植によるところが大きく、層内には葉理が多くみられることから、人為的な活動がほとんど行われなかった可能性を考えた。しかし、土壌の攪拌度合いは期間に比例することや、第6-1層上面には大規模な氾濫を示す土砂が堆積することから、短期間の営為や耕土の流失を考慮し、微化石分析を行った。分析では、短期間の耕作や堆積速度が速い場合には反映されにくいとの指摘を受けたものの、本遺構面における水田耕作の存在を示唆する結果を得た。少なくとも近隣において水田耕作が継続された可能性は高い。

07055高まり周辺は下面と変化がみられず、氾濫の影響をほとんど受けていなかった。高まりの断面によると、地形の改変等が行われた形跡はまったく認められない(図53・88)。

唯一の水路として残った07002溝は、本遺構面においても機能することは可能であったが、改修等の手入れが行われた様子はなく、自然に埋積するまま放置されていたと考えられる(図129)。地形的な高所を選び、灌漑用施設として完成させた07055高まりではあったが、度重なる自然災害により周辺の水田が使用不可能となったため、その役割を回復することなく、放棄されたのであろう。しかし、それは高まり周辺の再開発に着手しなかったことを示すだけのものであり、継続して遺物が出土する様子から、当地区を放棄したものではないことは明らかである。

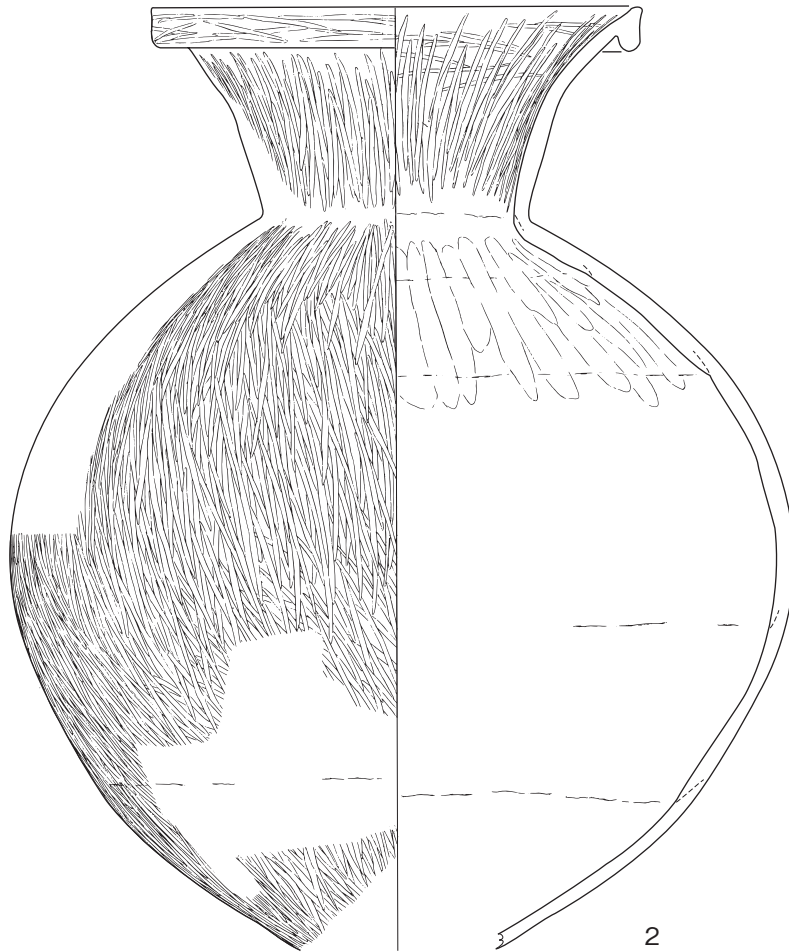
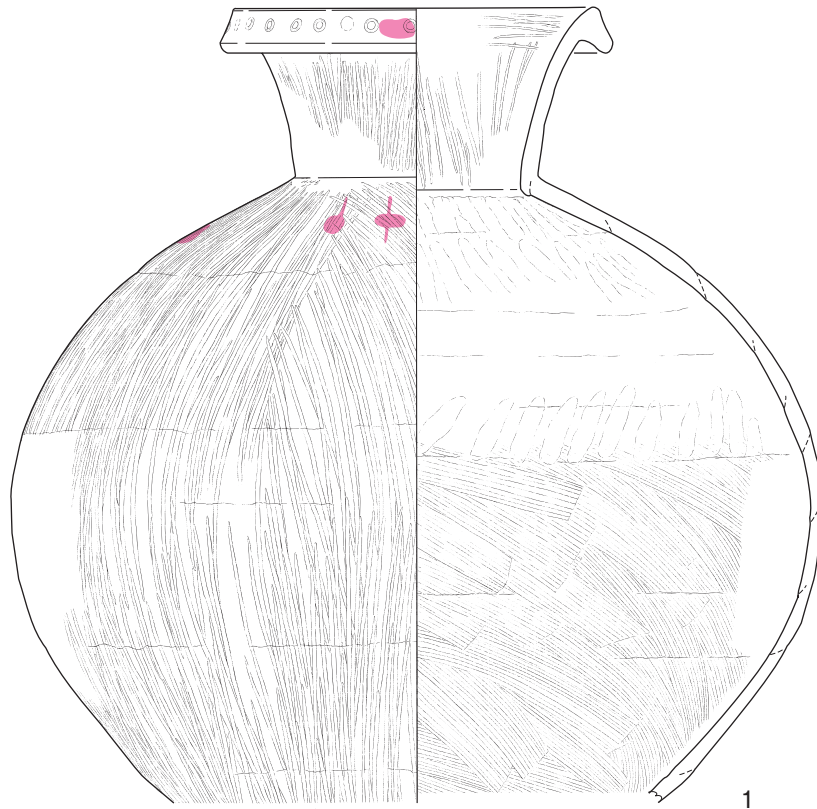
遺物は、同高まり周辺の06027高まりや07001溝の名残である落込等から出土した。06027高まりは07055高まりの西側に位置し、06015大畦畔が消失した後に築かれたと考えられるものの、後世の攪乱のため詳細は不明である。この上面より2個体分の大型壺が出土した(図128、図版292)。いずれも生駒西麓産胎土であり、1は口縁端部外面と肩部に赤彩を施す。

高まり上面の07001落込からは、口縁端部内面・肩部に竹管による同心円文、口縁端部外面に円形浮文を施す壺が出土した(図129・130-4、図版293)。上記の2点と共に、いずれも底部が欠損しており、実用的ではないことから、治水等の祭祀目的で置かれた可能性が高いと考える。また、同落込からはミニチュアの壺・鉢も出土している(図130-1~3、図版293)。やはり日常雑器ではないことから、上記と同様、祭祀用に使用されたものと考えられる。

調査区中央は上層の第5-2b層による浸食が著しく、遺構はほとんど検出できなかった。このような状況の中、氾濫堆積物の間にわずかに残存する砂混じり泥土の範囲を示したものが06017流路である(図127)。

06017流路は、第7面の080916溝が埋没して形成した微高地を斜めに横切りながら北東へのびる。周囲には手指状に広がる浸食の跡があり、最終的に氾濫したことは明らかである。下面にて第6-2b層に発生した氾濫の排水流路として形成され、本遺構面まで残った自然遺構と考えられる。流路底面において多数の足跡を検出したことから、生業の場として利用されたと推測する。

調査区西半は、第6-2b層の氾濫に伴って地形が大幅に上昇した地域であり、標高としては07055高まり周辺の微高地とほぼ同等となっていた。第6-2面においても灌漑用水路のような溝を検出した



0 (1:4) 20cm

图 128 06027 大哇畔 出土遺物



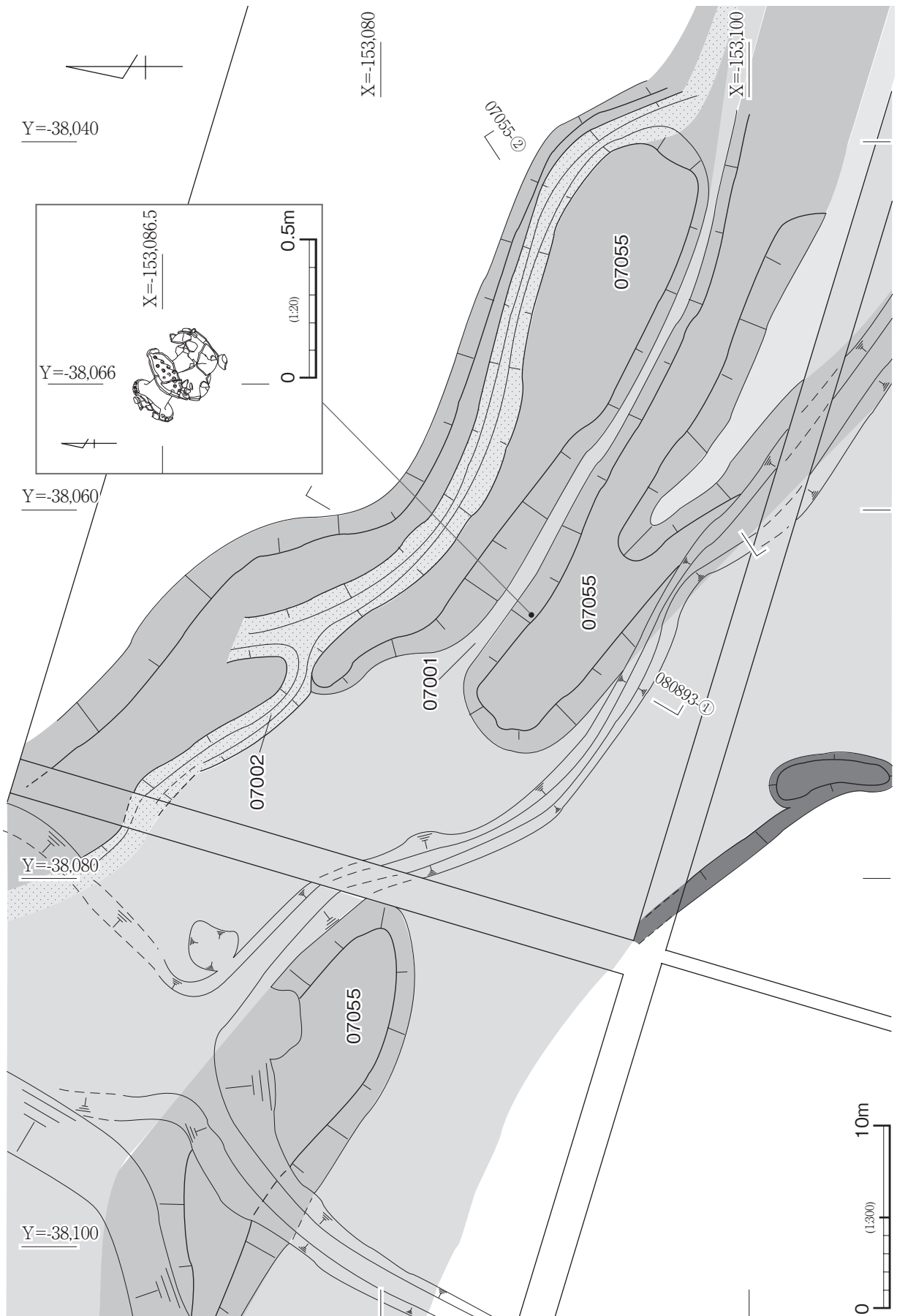


图 129 07055高まり・07001落込 平面・遺物出土状況

ものの、それ以上の詳細は不明であった（図114）。

06035溝は調査区西端の中央付近において検出した遺構である（図127）。北東に向かって流れたと考えられ、溝の両側には堤状の高まりが確認された。南端が06037流路による攪乱のために不明ではあるが、同流路を挟んだ南側に、上記につづくと思われる堤状の高まりと水田畦畔らしき遺構が確認される（図版53-3・5・6）。

植物珪酸体分析によると、当地区の北西に位置する04-1調査区の第6-1層は、イネの密度が高い傾向にあることから、稲作を行っていた可能性が高いという結果を得ている。これらのことを鑑みると、第6-2b層の堆積によって微高地化した調査区の西側では、氾濫後に水田耕作を再開していた可能性が高いといえる。第7面では調査区西側は低湿すぎたためか、あまり水田遺構が顕著ではなかったものの、第6-2b層の氾濫による地形の逆転現象により、調査区東側に換わる水田耕作適地として利用されるようになったと推測する。

第6-1層の遺物は、土器・木製品のいずれについても、第5-2b層を除去した旧地表面上に点々と散見されたものが多い（図131・132、図版293~296）。これらの中には、図131-2・5・8のような完形の状態出土した遺物もあり、放置されたか、あるいは当地に漂着したようにも見受けられる。このことから、第5-2b層の氾濫が発生する直前を示す遺物群と考えられる。図131-6・7は下層の遺物が混入したものであり、弥生時代中期に比定される。7は第Ⅲ様式に遡る壺口縁片であり、当調査区の空白時期を埋める資料である。8は肩部にヘラ記号を施す壺である。ヘラ記号の上から放射状のミガキを行う。9は口縁端部に沈線と刺突文、肩部に刺突文を施す。全体的な様相から、本遺構面

は弥生時代後期中葉以降に比定できると思われる。

これらの遺物が前述の07055高まり等から出土した遺物より、若干後出土することは明らかであり、先の土器を伴う人為的な活動の後、しばらく経てから、本遺構面を覆う大規模な氾濫が発生したと考えられる。

図132-1はヤナギ属の割材を使用し、上部をやや広く削り出すことから、杓子あるいは匙の未成品と思われる。2は柁目取りしたスギ板の縁を面取りし、ホゾ穴と抉りを加工する。台座の一部と推測する。4はスギ板材に多数のホゾ穴が穿たれており、構造材と推測する。

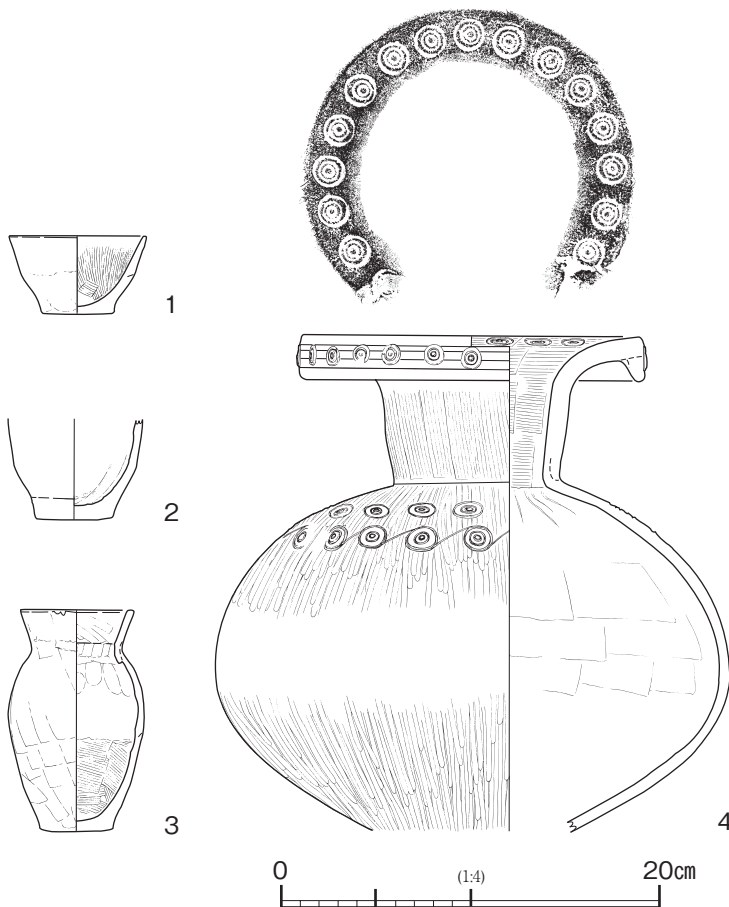


図130 07001 落込 出土遺物

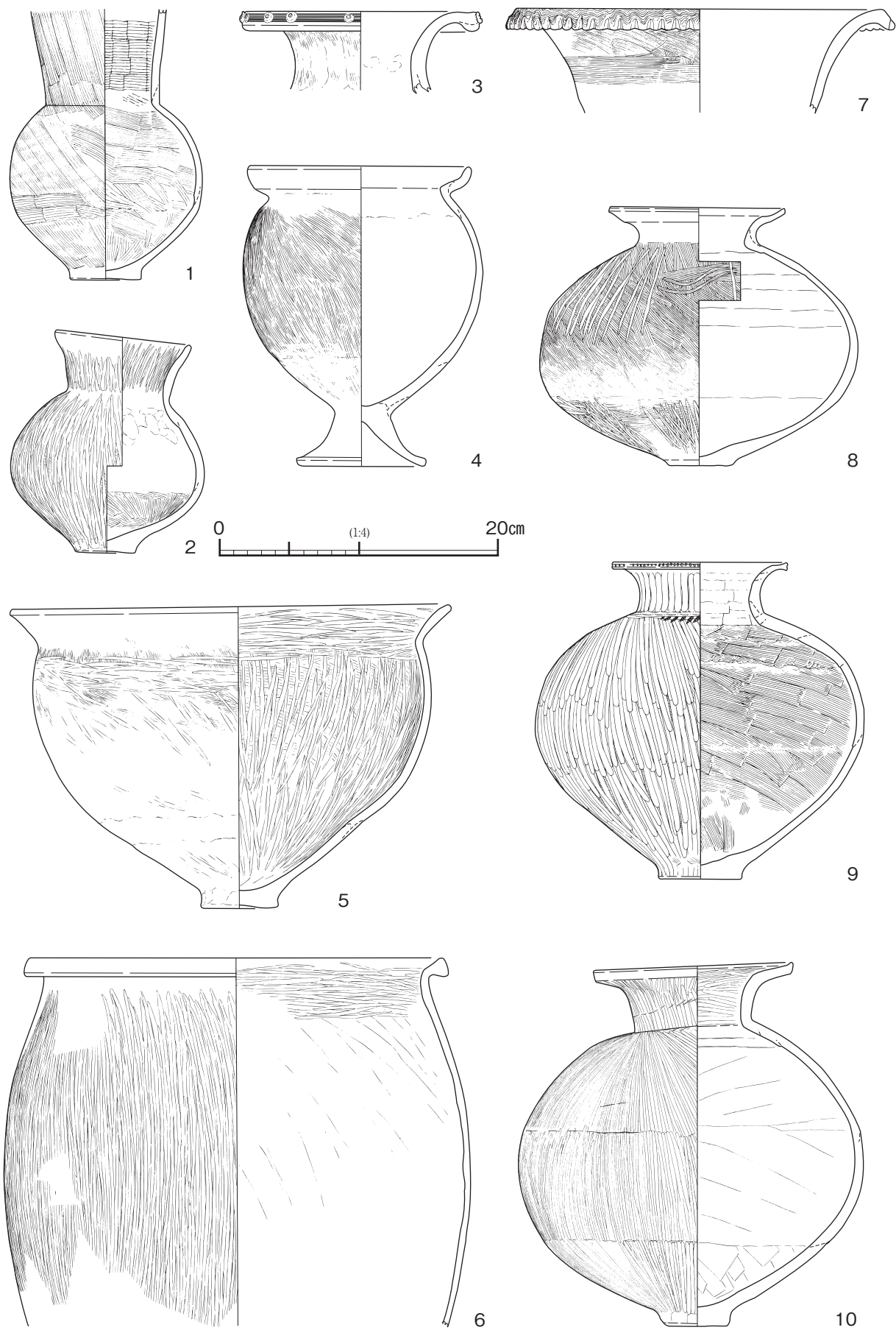


图 131 第 6—1 层 出土遗物 (1)

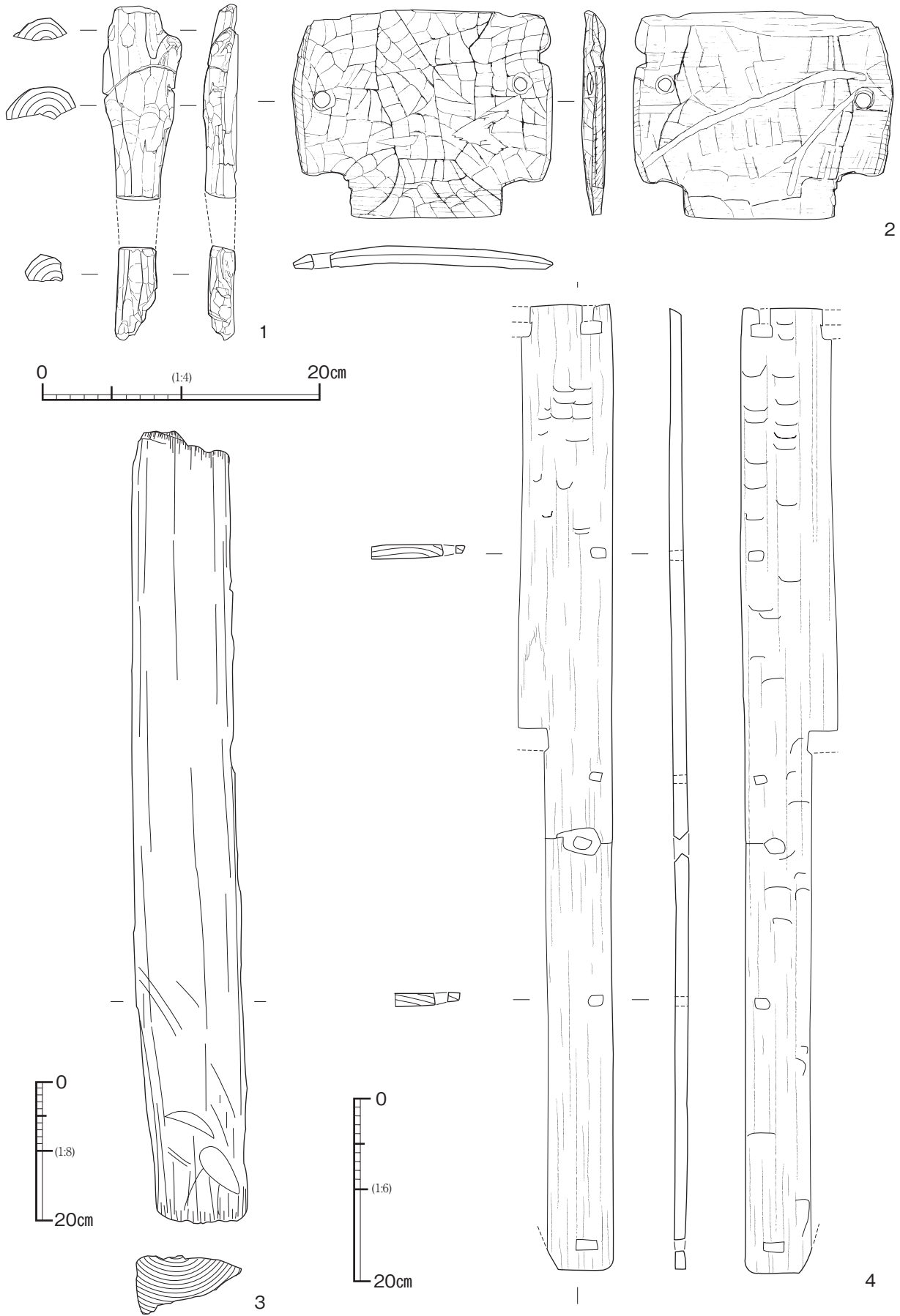


图 132 第 6-1 层 出土遗物 (2)

## 第5章 弥生・古墳時代の遺構と遺物

### 第1節 第5面

#### 1. 概要

下面では、調査区内における明確な水田遺構はみられなかったものの、高まりや微高地上の水路の存在、イネ花粉や植物珪酸体の分析等により、当地を含む近隣地域での水田耕作を想定するに至った。しかし、弥生時代後期後半頃に発生した大規模な洪水により、調査区全域が厚い氾濫堆積物に覆われることとなり、当地周辺の地形環境は大きく変化した。

氾濫によってもたらされた第5-2b層は、調査区西半の中央付近に最も厚く堆積しており、層厚は約1.5mを測る（付図1）。しかし、 $Y = -38,100$ 以西では平均して1.0mほどの堆積がみられることから、調査区の西側一帯という広範囲に土砂が供給されたことがわかる。この範囲では粗砂から細砂を主とする粒径の大きい砂土が多く堆積するのに対し、反対の調査区東側ではシルトしか検出されていない。これらの氾濫堆積物をもたらした洪水は、第6-2面における調査区西側の06017・06037流路を端緒としており、流路の底面には土砂の流入による第6層の下刻が確認された。特に06017流路は流れ込んだ大量の土砂を周囲に吐出しながら自然堤防を形成し、次第に収束していったものと考えられる。

調査区の西端には第6-2b層の堆積によって形成された微高地が存在したはずであるが、06017・06037流路の氾濫堆積物に埋没してしまった。調査区の東西土層断面によると、同流路から東側は幅約90mに達する自然堤防が形成され、その外側となる調査区東側には後背湿地が広がっていたと推測する。06017流路の埋没により行き場を失くした水流が調査区東側の自然堤防と後背湿地の間を流れるようになったものが、後述する05006落込である。第8b層に達するような浸食や新たな自然堤防の形成がみられることから、05006が単なる洪水の排水路ではなく、流路として一定期間存在していたと考える。

一方、調査区の東側においては上記と異なる様子が見受けられ、南側の $Y = -38,140$ 以東では南東北西方向に広がる微高地が看取された。調査区東側の南北断面によると、本微高地を形成する土砂は後背湿地泥層の上部に厚く堆積し、攪乱を挟んだ北側ではすでに収束している（付図2）。本調査区の南に位置する既往の調査成果（竜華地区Ⅵ）と合わせて考えると、おそらく東側の後背低地に移動してきた流路から北東に向かって越流した堆積物の北端部分に該当することがわかった。これより北西側は高低いずれにおいても一様に湿地性泥土が堆積することから、西側の自然堤防が形成された後、しばらくは水没したままの状態にあったと推測される。ただし、調査区北東隅に向かうほど第5-2b層の砂質が強くなることから、東側の調査区外からの破堤堆積物が存在した可能性も考えられる。

このように、第5-2b層が厚く堆積した調査区西側を中心とする大半は、自然堤防上に位置することとなり、平均標高はT.P.+6.0m弱を測る。一方、氾濫堆積物の及ばなかった調査区東側は、中央付近がT.P.約+5.5mと最も低位となり、そこから北と東に向かって緩やかに上昇する谷底平野を呈することになった。この景観は第5面においてほぼ変化することがなく、安定した地形であったと考えられる。

第5層は、調査区の大半においては漸次的に変化する土壌化層と、上記のような本遺構面の基盤層である氾濫堆積物によって構成される。第5a層は、土壌化の程度による細分が可能であり、上部を第5

Y=-38,050

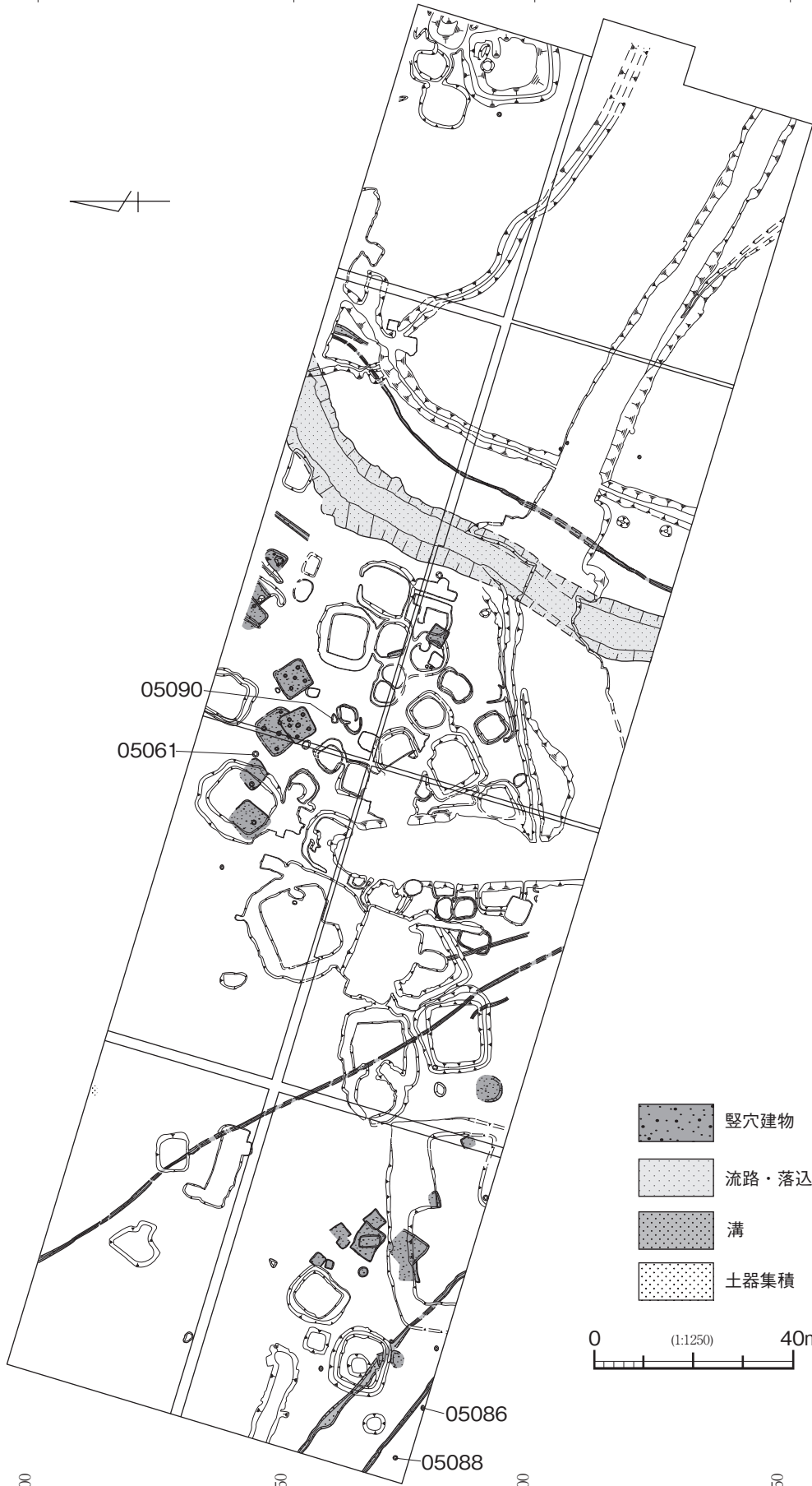
Y=-38,100

Y=-38,150

Y=-38,200

Y=-38,250

Y=-38,300







X=-153,000

X=-153,050

X=-153,100

X=-153,150

-  竖穴建物
-  流路・落込
-  溝
-  土器集積

0 (1:1250) 40m

图 133 第 5-2 b(2)面 遺構分布

-1層、下部を第5-2層とし、基盤層を第5-2b層とした。このうちの第5-1層は、土壌化が非常に顕著であり、調査区の全域においてほぼ普遍的に認知が可能である。極めて局所的ではあるが、間層として自然堆積層の第5-1b層を検出する。しかし、調査区の南東部を中心とする狭い範囲において、第5-1層が分化する状況を確認した。これは同地区に現れる新たな流路によるものであり、狭い範囲ではあるが、遺構面の形成がみられることから、上部を第5-1(1)層、下部を第5-1(2)層と区別した。

一方、土壌化層の下半である第5-2層は、上層ほど土壌化が著しくないものの、概して層厚があり、調査区のほぼ全域において検出が可能である。調査区の西側を中心とする自然堤防上では、最大3つに分層が可能であるが、局地的であったり、層界が非常に不明瞭であったりするため、基本的には単一層として捉えることにした。

このような土壌化層は、主に調査区の西側に認められる傾向であり、調査区東側の低地部ではまったく異なる状況が看取された。自然堆積層を間層とする複数の土壌化層が検出され、いずれの旧地表面においても水田遺構を確認できたことから、それらが耕土であることは間違いない。間層を挟む点から、小規模な氾濫が発生する毎に水田面を復旧した跡と考えられる。現地の調査では、遺構を検出したために第5-3面以降の名称を設定したが、それより以下の遺構面は周囲の第5-2面に収斂することや検出が後背低地部に限定されることから、第5-2面の細分として認識することにした。ただし、検出した水田遺構の状態があまり良好ではなかったことと、周辺の灌漑施設等に変化がみられないことから、旧地表面として別立てにすることは省略した。

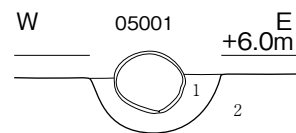
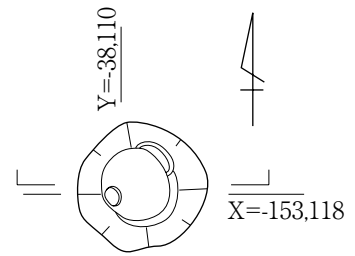
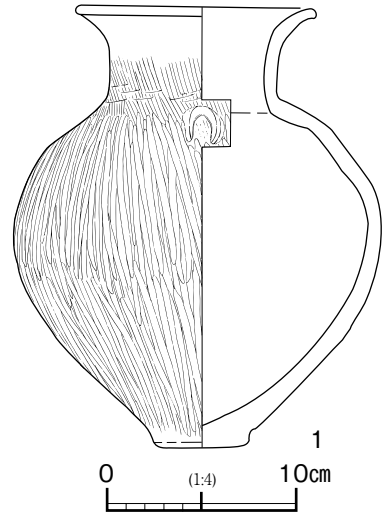
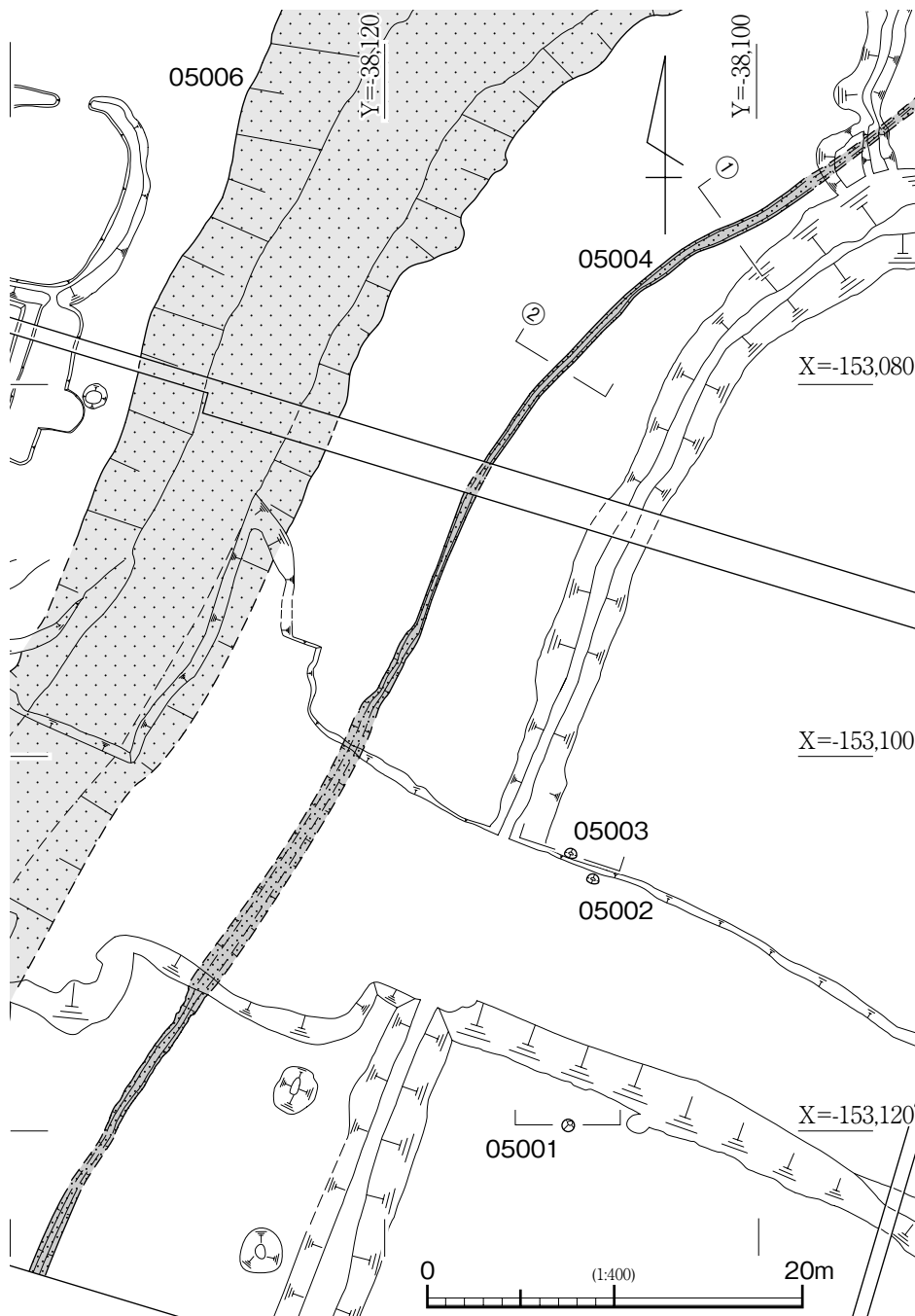
なお、第5-2層を除去した第5-2b面の遺構検出において明らかな切り合い関係の存在を確認したことから、上下に分かれた遺構群にのみ特化した遺構面の設定を行った。検出した遺構のうち、新しいものを第5-2b(1)面、古いものを第5-2b(2)面とするが、土層断面図上の第5-2b層内に表す層界とはまったく無関係であることをお断りしておく。

## 2. 第5-2b(2)面の遺構と遺物

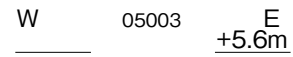
概要において記載したとおり、第5-2層除去面である第5-2b面は、検出した遺構の新旧に合わせた上下2つの遺構面として報告する。

調査区周辺における既往の調査においても、第5-2b面に相当する遺構面では、本調査区と同様の耕作痕や遺構を多数検出している。いずれも土壌化層の除去面において同時に検出した遺構として報告され、遺構同士の新旧関係も明確であることから、上記の想定との間に齟齬がないと判断する。今回の調査では多数の墳墓を確認したが、その墳墓築造の基盤となる旧地表面が第5-2層上面であり、墳丘下に残存する同層を詳細に観察したところ、前述のように最大3つに分化することが明らかとなった。墳墓の下層という限定された地点であり、なおかつ墳墓以外での細分層との整合が図れないため、新たな遺構面として設定することは断念した。

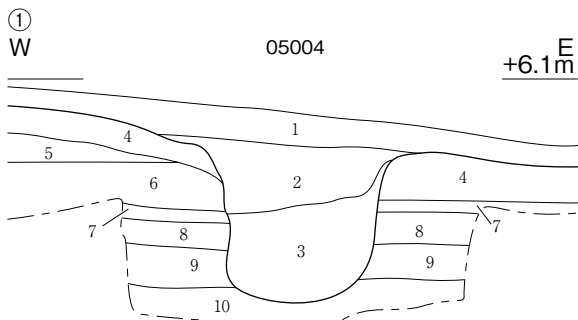
しかし、墳墓の下面調査を行うと、耕作痕は第5-2層の掘削途中では現れ、それらの検出面にも上下が存在することを確認した。第5-2層の大半を除去し、耕作痕の上部を削平した時点で、ようやく耕作痕の間隙から竪穴建物等の輪郭を検出できることから、遺構の検知は最下面にて行い、耕作痕は傾向だけを把握することにした。その結果を整理したものが、第5-2b面の細分となるのである。そして、もう一つの理由として挙げられるのが、自然堤防東側に位置する05006流路・落込や05100溝の存



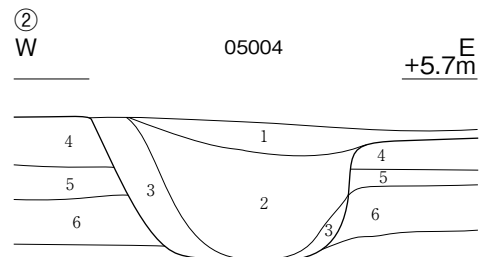
- 1 灰 7.5Y5/1 シト～中砂
- 2 淡黄 2.5Y8/3 微砂～粗砂



- 1 青灰 5BG6/1 小礫混シト



- 1 灰 7.5Y4/1 粗砂混シト・微砂
- 2 灰 7.5Y4/1 微砂混シト
- 3 緑灰 7.5Y5/1 シト (粘性あり 炭化物含む)
- 4 灰 7.5GY4/1 微砂混シト
- 5 赤-ブ 褐 2.5Y4/4 細砂
- 6 暗灰黄 2.5Y4/2 微砂
- 7 黄褐 2.5Y3/4 粗砂
- 8 赤-ブ 黒 7.5Y3/2 シト (粘性あり)
- 9 灰 5Y4/1 シト (粘性あり)
- 10 暗緑灰 5G4/1 粘土・シト



- 1 灰 5Y4/1 微砂
- 2 赤-ブ 黒 5Y3/1 微砂 (炭化物含む・ブロック状)
- 3 にぶい黄 2.5Y6/4 細・中砂 (ブロック状)
- 4 灰 5Y4/1 微砂混シト
- 5 にぶい黄 2.5Y6/4 細・中砂
- 6 灰 10Y4/1 シト (粘性あり)

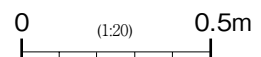


図 134 05006落込周辺遺構 平面、05001ピット・05003土坑・05004溝 断面、05001ピット 出土遺物



在である。これらの遺構は、複数の遺構面に亘って存続していたことが明らかであり、それぞれの遺構にみえる変化と検出した遺構面の数が一致しなかった。本遺構面については、他の遺構の状況と05006落込・05100溝の変化が整合したため、遺構面を分解することにより遺構および土地利用の変遷を明瞭にしようとしたものである。

第5-2b(2)面において検出した遺構は、流路・溝・竪穴建物・土坑・ピットである(図133)。氾濫が収束した後に残った05006落込(流路)以外は、大半の遺構が西側の自然堤防上に位置し、高所で安定した土地に居住域を復旧した様子が想像される。

Y = -38,130付近に位置する05006落込の東側には幅約20mの自然堤防が形成されており、その東端周辺では05001~05003ピット、上面では05006落込に並行しながら北東へと流れる05004溝を検出した(図134、図版54-1)。南側に位置する05001ピットは、直径約40cm、深さ約20cmを測る。遺構内部から、肩部に記号状の浮文を施す弥生時代後期後半頃の壺が出土した(図134、図版55-2)。北側にある05002・05003ピットも同様の遺構である(図134)。

05004溝は、自然堤防が東に向かって下降する斜面の途中に位置し、05006流路に並行しながら北北東へのびる。溝の幅40cm~1.0m、深さ30~50cmを測り、断面形はU字状を呈する。埋土に水成堆積が残っており、土壌化層のみであることから、人為的に埋め戻されたものと思われる(図版55-3)。しかし、周囲には重層する耕土が確認できることから、灌漑用に設置された水路と考えられ、おそらく05006流路の上流から分水されたものであろう。なお、本溝からの出土遺物はみられなかった。

05006落込(流路)は、調査区中央よりやや東側、Y = -38,130付近を北北東へのびる自然遺構である(図133、図版55-4)。幅11~14m、自然堤防上からの深さ約1.8mを測る。前述のとおり、第5-2b層の堆積により調査区西半が自然堤防化したため、この氾濫堆積物を供給した流路が行き場を失い、最終的に流れ込んだ形状が05006流路である(図版56-1)。図示した断面は流路の中央付近および南側のものであり、上面の遺構と重複する主要な位置に設定したものである(図136)。断面の観察によると、05006流路の最下底面はいずれにおいても1つの緩やかな弧状を呈し、埋土が同一の砂土であることから、当初は自然流路であったことが明らかである(図135・136、図版56~57)。遺構の重複が少ない南側の断面③によると、埋土の下層に自然の土砂が重層的に堆積しており、人々が周辺に生活域を形成して05006流路を利水し始めるようになった早い段階に、埋積が進行して止水性の落込と化したものと考えられる(図136)。第5-2b面では、05006落込周辺の自然堤防上は次第に耕地化され、灌漑用として自然流路以外に水路を新たに開削する一方、本落込の水量を回復するための再掘削も行われる。05006が完全に埋没する第4面までに、さらに溝の掘削や築堤等の様々な改変が行われており、その変化については各遺構面にて詳細を後述する。

このような変遷は、05006遺構の断面や全体の平面形、および周辺遺構との関連といった総合的な検討から導き出したものであるため、各調査区の間遺構に関するそれぞれの成果とは一致してしない。特に遺物はその一つであり、各地点に重複する遺構が多いため、出土遺物の取り上げに遺構と層位の混同が生じている。検討の結果想定される遺構の変遷に対し、遺物の層位的な検証を行えないのが実状である。本報告では、05006の初現である第5-2b面において、総括的に全層位の出土遺物を掲載することにした。また、従来の型式に則った分類を行うと事実を誤認する恐れもあったため、あえてそれらは無視し、器種毎に列挙して紹介するだけに止める。

05006流路・落込の遺物として図示したものの多くは、調査区の南北両端において、落込の肩部や中

央の高まりに集中して出土したものとされる（図136下）。当初の調査では、05006を中央に高まりを形成する断面「W」字形の1つの溝と考えていたが、後に調査区の内側を平面的に調査した結果、同流路の埋積が進行して落込へと変化し、その東半部に新たな05308溝を掘削したことによる形状であることが明らかとなった。つまり、高まりを挟む2条の凹みは並存しておらず、単一時期の遺構でもないことから、これらの遺物の帰属が不透明となってしまった。このような出土状況が確認されたのは周縁の調査区のみであり、後の調査では遺物の出土自体がわずかであり、同様の出土状況も認められなかったため、検証することは不可能であった。ただし、遺物は破碎されるものの個体を識別できる例が多いことから、廃棄されたものではなく正置されていたと考える。土器が帯状に連なる様子から何かの形状に沿っていたと考えられ、東側の05308溝の掘削によって新たな遺構肩部が形成されることから、その盛土内か、上面のいずれかに伴う遺物と推測する。これらの原因や時期を特定することは困難であり、流路が落込へと変化して機能しなくなった前後と予測し、第5-2面が最も近似の遺構面と考える。

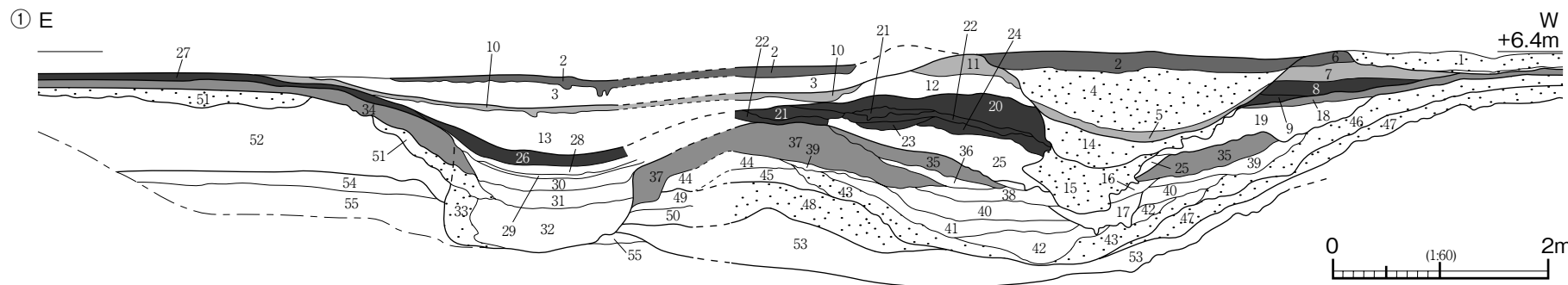
出土した遺物には、土器以外に石製品・木製品が含まれる（図137～147、図版297～318・341・342・450・501）。土器は、図144-11のような下層を浸食した際の混入品がみられるものの、庄内式期古段階を中心とする前後に比定できる。前述のように複数の埋土の遺物が混在しているため、様相を明示することは避ける。特筆すべき点は、赤色顔料付着土器（図138-11、139-31、143-1）、被籠土器（図138-12）、搬入（模倣含む）土器（図139-23、141-13、144-4・8・12・13）の存在である。特に搬入土器には山陰・讃岐・近江・東海等がみられ、当時の交易範囲を知る手掛りとなる。石製品は図145-3・4であり、いずれも使用痕として上面が凹面となる。木製品は部分的に加工した棒状不明品が多く、一部は被熱による炭化がみられる。他に木錘、機織具、構造材がみられる。図146-3はアカガシ亜属による一木作りの櫂であり、堅強な木材を選択・加工した技術と、効率性を重視した形状は注目される。図147-2は束ねた樹皮を円形にしたものを巻いて固めたものである。類品が石川県八日市地方遺跡等で出土するが、用途は不明である。図147-6はアカガシ亜属による板状製品である。外面を丁寧に整形し、上方にホゾ穴を伴う差込溝があることから、椅子等の脚部と推測する。

05006流路の西側に広がる自然堤防上では、多数の竪穴建物や溝、土坑などを検出した（図133）。

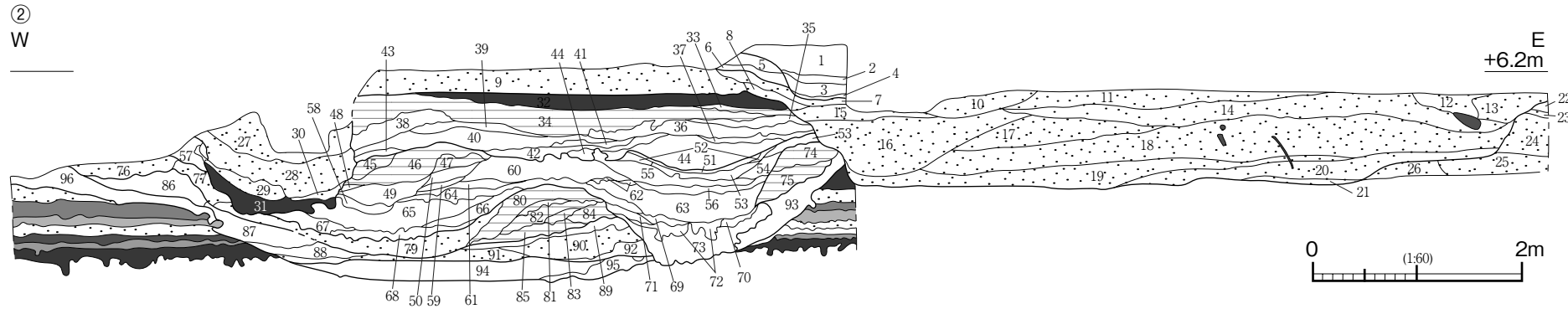
竪穴建物群は計22基を検出したが、調査区西半の中央を南東北西にのびる05059溝を境として東西に分かれる。南に位置する既往の調査区「竜華地区Ⅵ」においても、同じ自然堤防上から約7基の竪穴建物がみつかり、数棟の建物で構成する集合体が点在していた可能性を考える。

05006流路の北西、調査区中央の北側に位置する竪穴建物群は9基を数える（図150）。検出した建物は、規模に大小がみられるものの、いずれも平面形は隅丸方形を呈する。地上の構造物は後世の耕作を受けて削平されており、辛うじて内部から柱穴と炉跡を確認した。幾つかの建物には新旧の切り合いが認められることから、建替え等が行われたのであろう。これらの建物の近辺には、関連施設と思われる土坑や井戸を伴う。

05007土坑は、竪穴建物群の中の北東部、05020～05024竪穴建物の南側に位置する（図149、図版57）。遺構の北側は調査区境のため不明であるが、検出した平面は不定な楕円形を呈し、長径約3.4m、深さ約40cmを測る。埋土は上下2層に分かれ、いずれも炭化物を多量に含む第5-2b層と第5-2層のブロック土である。遺物は、埋土の上層からまとまって出土した。埋土の層界が非常に乱れており、遺物の出土位置も高低が激しい（図版57-6）。出土土器のほとんどが欠損することから、単なる廃棄土坑とも考えられるが、上記の出土状況を考慮すると、土坑内部で何らかの作業を行った可能性が高い

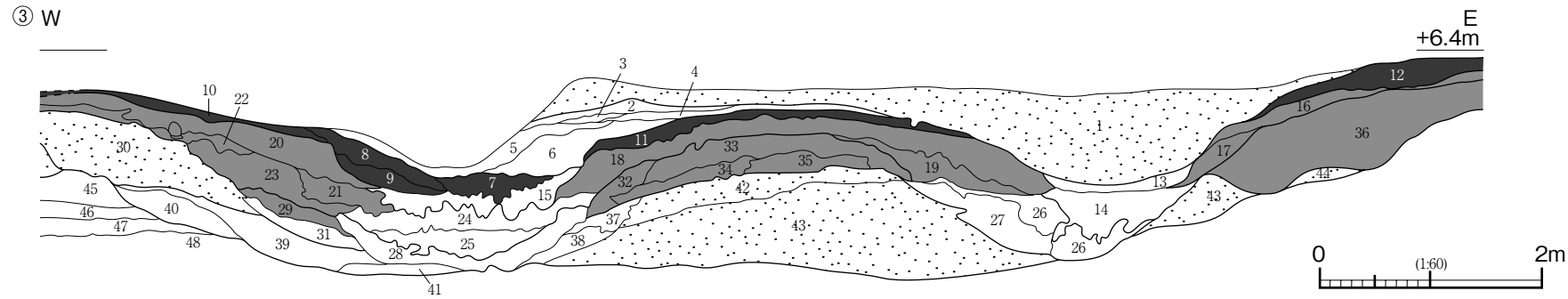


1 灰黄	2.5Y6/2	微砂～中砂	(Fe沈着)	21 灰初-ブ	5Y5/2	細砂	(粗砂・シルトブロック含む)	40 初-ブ黒	7.5Y3/1	粘土シルト	(植物遺体含む 弱いラミあり FeCo3)
2 灰	10Y6/1	微砂～粗砂混シルト		22 初-ブ黒	7.5Y3/2	細砂混シルト	(植物遺体含む)	41 初-ブ黒	10Y3/1	粘土～微砂	(植物遺体わずかに含む FeCo3)
3 灰	7.5Y4/1	シルト～粗砂	(植物遺体含む ラミあり)	23 灰初-ブ	5Y5/2	細・中砂		42 初-ブ黒	10Y3/1	シルト～細砂	(炭化物含む ラミあり FeCo3)
4 灰初-ブ	5Y6/2	シルト～細砂	(ラミあり)	24 灰初-ブ	5Y4/2	シルト～粗砂	(ブロック状)	43 暗初-ブ灰	2.5GY4/1	粘土シルト～細砂	(FeCo3 炭化物含む)
5 灰	7.5Y4/1	シルト・微砂	(植物遺体含む)	25 暗初-ブ灰	2.5GY4/1	粘土～細砂	(植物遺体含む ラミあり)	44 青灰	10Y7/2	微砂	(ラミあり)
6 暗灰黄	2.5Y5/2	細砂混シルト	(中砂含む)	26 灰	N6/	シルト	(粘性あり 有機物含む)	45 灰初-ブ	5Y4/2	細砂	(シルトブロック含む)
7 灰	7.5Y4/1	細砂混シルト	(中砂含む 斑鉄)	27 灰	7.5Y5/1	微砂～中砂混シルト		46 初-ブ黒	5Y3/2	細砂混シルト	(中砂・炭化物含む)
8 灰	7.5Y4/1	微砂～中砂		28 灰白	10Y7/2	細砂	(ラミあり)	47 灰	10Y4/1	細砂混シルト	
9 灰初-ブ	5Y5/2	微砂混シルト		29 灰	7.5Y6/1	シルト	(粘性あり)	48 灰初-ブ	5Y5/2	シルト～細砂	(シルトブロック含む ラミあり)
10 灰	10Y6/1	シルト	(粘性あり 植物遺体含む)	30 灰	10Y5/1	シルト	(粘性あり 植物遺体多く含む)	49 灰白	10Y6/1	微・細砂	(ラミあり)
11 灰	7.5Y4/1	細砂混シルト	(中砂含む 斑鉄)	31 緑灰	5G5/1	細砂混シルト	(粘性あり)	50 灰初-ブ	7.5Y6/2	シルト～細砂	
12 灰	7.5Y4/1	細砂～粗砂混シルト		32 緑灰	10G5/1	細砂混シルト	(粘性あり 粗砂多く含む)	51 灰	5Y5/1	シルト～細砂	
13 灰初-ブ	5Y4/2	シルト～細砂		33 青灰	5B5/1	微砂混シルト	(粘性あり)	52 灰黄	2.5Y7/2	微・細砂	
14 灰初-ブ	5Y5/2	シルト・粗砂	(ブロック状 ラミあり)	34 灰	5Y6/1	シルト～細砂	(小礫含む)	53 灰初-ブ	5Y6/2	中砂～小礫	(ラミあり)
15 暗初-ブ灰	5GY4/1	シルト～細砂	(植物遺体含む ラミあり)	35 暗緑灰	7.5GY4/1	粘土シルト	(植物遺体含む FeCo3)	54 青灰	5B6/1	シルト	(粘性あり ラミあり)
16 初-ブ黒	5Y3/1	粘土シルト	(植物遺体多く含む FeCo3)	36 暗緑灰	10GY4/1	シルト微砂	(植物遺体含む)	55 緑灰	10G6/1	シルト	(粘性あり 有機物多く含む)
17 初-ブ黒	10Y3/1	粘土～微砂	(植物遺体含む FeCo3)	37 暗緑灰	7.5GY4/1	粘土シルト	(細砂・炭化物含む FeCo3)				
18 初-ブ黒	5Y3/2	細砂混シルト	(炭化物含む)	38 初-ブ黒	5Y3/1	粘土シルト	(植物遺体多く含む FeCo3)				
19 初-ブ黒	7.5Y3/2	シルト～細砂	(中砂・炭化物含む)	39 暗緑灰	7.5GY4/1	粘土シルト	(植物遺体含む)				
20 初-ブ黒	5Y3/2	細砂混シルト	(粘性あり 微細ブロック状)								



1 淡黄	7.5Y8/3	細砂		26 灰	N5/	微砂	(ラミあり)	51 灰初-ブ	5Y4/2	細・中砂混シルト	(植物遺体含む)	76 灰	7.5Y4/1	シルト～細砂	(弱いラミあり)
2 青灰	5GY6/1	シルト	(粘性あり)	27 灰初-ブ	5Y6/2	シルト～細砂	(上方粗粒化 ラミあり)	52 灰初-ブ	5Y4/2	細砂混シルト	(植物遺体含む)	77 灰	10Y4/1	シルト～細砂	(弱いラミあり)
3 灰	10Y6/1	シルト	(粘性あり)	28 にぶい黄	2.5Y6/3	シルト～小礫	(ラミあり ブロック状)	53 灰	5Y4/1	細砂混シルト	(炭化物含む)	78 灰	10Y4/1	粘土シルト	(ラミあり)
4 灰	5Y6/1	シルト	(粘性あり 植物遺体含む)	29 初-ブ黄	5Y6/3	シルト～細砂	(ラミあり)	54 灰初-ブ	7.5Y4/2	細砂混シルト	(中砂・シルトブロック含む 炭化物わずかに含む 斑鉄)	79 灰	10Y4/1	細・中砂混粘土シルト	(炭化物わずかに含む FeCo3)
5 灰白	7.5Y8/2	小礫混細砂		30 初-ブ黄	5Y6/3	シルト～細砂	(ラミあり)	55 灰初-ブ	5Y5/2	細砂混シルト	(微細ブロック状 上半に斑鉄)	80 灰初-ブ	5Y4/2	細砂混シルト	
6 灰白	10Y8/2	細砂		31 初-ブ黒	7.5Y3/1	粘土シルト	(ブロック状 小礫含む)	56 灰	10Y4/1	粘土シルト	(有機物を含む ラミあり)	81 灰初-ブ	7.5Y4/2	粘土シルト、中・粗砂	(微細ブロック状)
7 灰	N6/	微・細砂	(ラミあり)	32 灰初-ブ	5Y4/2	シルト混細・中砂	(粗砂・シルトブロック・植物遺体含む)	57 灰	5Y4/1	細砂混シルト	(炭化物含む)	82 灰初-ブ	5Y4/2	シルト～細砂	(炭化物含む 弱いラミあり)
8 灰白	5GY8/1	微砂	(ラミあり)	33 灰	10Y4/1	粘土シルト	(微砂・植物遺体含む 弱いラミあり)	58 初-ブ黒	7.5Y3/1	粘土シルト	(ブロック状 小礫含む)	83 暗初-ブ	5Y4/3	細砂	
9 灰白	5GY8/1	微砂	(ラミあり)	34 暗灰黄	2.5Y4/2	シルト混細・中砂	(粗砂・小礫・シルトブロック含む)	59 灰初-ブ	5Y4/2	粘土シルト	(細砂・炭化物含む 下半微細ブロック状)	84 灰	10Y4/1	粘土シルト・細砂	(微細ブロック状)
10 灰白	5Y8/2	小礫		35 暗初-ブ	5Y4/3	粘土シルト～細砂	(ラミあり)	60 暗初-ブ灰	5GY4/1	細砂混粘土シルト	(粗砂わずかに含む 炭化物含む 斑鉄)	85 暗初-ブ灰	5GY4/1	シルト・微砂	
11 灰白	5GY8/1	微・細砂		36 灰初-ブ	5Y4/2	シルト・細砂の互層		61 暗初-ブ灰	2.5GY4/1	粘土シルト	(中砂含む 炭化物わずかに含む)	86 灰初-ブ	7.5Y4/2	シルト～細砂	(ラミあり)
12 灰白	5Y8/2	細砂		37 暗初-ブ	5Y4/3	細・中砂混シルト		62 灰	7.5Y4/1	微砂混粘土シルト	(微細ブロック状 炭化物含む)	87 灰	7.5Y4/1	シルト～細砂	(ラミあり)
13 灰	10Y4/1	細砂混シルト		38 灰初-ブ	5Y5/2	中砂混シルト	(粗砂含む 斑鉄)	63 暗初-ブ灰	2.5GY3/1	微砂混粘土シルト	(炭化物含む FeCo3 変形構造)	88 不明			
14 灰白	2.5GY8/1	小礫		39 灰初-ブ	7.5Y5/2	シルト～細砂	(ラミあり)	64 暗初-ブ灰	2.5GY3/1	中砂混粘土シルト	(炭化物・植物遺体含む)	89 暗初-ブ灰	2.5GY3/1	粘土シルト	
15 灰白	5GY8/1	微・細砂		40 灰初-ブ	5Y6/2	細・中砂混シルト	(小礫含む)	65 灰	7.5Y4/1	細砂混粘土シルト	(微細ブロック状 FeCo3)	90 暗初-ブ	7.5Y4/3	細砂	
16 灰白	7.5Y8/1	小礫		41 灰初-ブ	5Y5/2	細・中砂	(弱いラミあり)	66 暗初-ブ灰	2.5GY3/1	細・中砂混シルト	(微細ブロック状 粗砂・植物遺体・炭化物含む)	91 不明			
17 灰白	N8/	小礫		42 暗初-ブ	5Y4/3	細・中砂混シルト		67 初-ブ黒	10Y3/1	中・粗砂混シルト	(炭化物含む)	92 暗初-ブ灰	2.5GY4/1	シルト・細砂の互層	(炭化物・植物遺体含む)
18 灰白	7.5Y8/1	小礫		43 灰初-ブ	5Y5/3	シルト混細・中砂	(小礫含む)	68 灰初-ブ	5Y4/2	シルト～細砂	(炭化物含む 弱いラミあり)	93 灰初-ブ	7.5Y5/2	シルト～中砂	(炭化物含む ラミあり)
19 灰白	7.5Y8/2	小礫		44 灰初-ブ	7.5Y4/2	シルト混中・粗砂	(シルトブロック・植物遺体含む)	69 初-ブ黒	7.5Y3/1	中砂混粘土シルト		94 灰初-ブ	5Y6/2	粗砂・小礫	
20 青灰	5BG5/1	シルト	(粘性あり)	45 灰初-ブ	5Y6/2	中・粗砂混シルト	(小礫・中・粗砂ブロック含む)	70 初-ブ黒	10Y3/1	細砂混シルト	(炭化物含む FeCo3)	95 暗初-ブ灰	2.5GY4/1	シルト～中砂	(ラミあり)
21 灰白	5Y8/2	小礫		46 灰初-ブ	5Y6/2	粘土シルト、中・粗砂	(小礫・炭化物含む)	71 暗初-ブ灰	2.5GY3/1	細砂混粘土シルト	(中砂わずかに含む)	96 灰初-ブ	5Y4/2	シルト～中砂	(小礫含む ラミあり)
22 灰	10Y5/1	小礫混シルト		47 灰	5Y4/1	細・中砂混粘土シルト	(微細ブロック状)	72 暗初-ブ灰	2.5GY3/1	微砂混粘土シルト	(粗砂わずかに含む 炭化物含む FeCo3)				
23 灰白	10Y8/1	微砂		48 灰初-ブ	5Y5/3	シルト～細砂	(小礫含む)	73 暗初-ブ灰	5GY4/1	細砂混粘土シルト	(中粗砂わずかに含む 炭化物含む ブロック状 FeCo3)				
24 灰	10Y5/1	小礫混シルト		49 灰初-ブ	5Y6/2	シルト～細砂	(ラミあり 変形?)	74 灰初-ブ	7.5Y4/2	細砂混シルト	(中砂含む 炭化物わずかに含む 斑鉄)				
25 灰白	10Y8/1	小礫		50 灰	7.5Y4/1	シルト～細砂	(ラミあり)	75 灰初-ブ	7.5Y4/2	細砂混シルト	(粗砂・炭化物わずかに含む 植物遺体含む)				

図 135 05006流路・落込 断面 (1)



1 灰	7.5Y4/1	粘土～細砂の互層 (フシあり 上方粗砂化 植物遺体含む)	25 灰砂-ア	5Y5/2	シルト～細砂 (炭化物含む 弱いフシあり Fe沈着)
2 灰砂-ア	5Y4/2	細砂混シルト (植物遺体含む 斑鉄)	26 砂-ア	7.5Y3/1	細砂混粘土シルト (中・粗砂・小礫・炭化物含む 変形構造?)
3 灰	5Y4/1	シルト～細砂 (弱いフシあり)	27 暗緑灰	7.5GY4/1	中・粗砂混粘土シルト (小礫わずかに含む FeCo3)
4 灰	5Y4/1	粘土シルト (細砂・植物遺体含む 斑鉄)	28 灰	10Y4/1	中・粗砂混粘土シルト (礫わずかに含む 炭化物含む)
5 灰砂-ア	5Y4/2	シルト～細砂 (フシあり)	29 暗砂-ア	2.5GY4/1	細砂混粘土シルト (炭化物含む FeCo3)
6 灰	7.5Y4/1	シルト～細砂 (フシあり)	30 灰	7.5Y5/1	微・細砂 (微細シルトブロック含む 弱いフシあり)
7 灰砂-ア	5Y4/2	細砂混シルト (微細ブロック状 粘土・炭化物含む)	31 灰	10Y4/1	粘土シルト～細砂 (植物遺体含む フシあり)
8 灰砂-ア	5Y5/2	細砂・シルト (微細ブロック状)	32 暗砂-ア	5GY4/1	粗砂混粘土シルト (小礫含む Fe沈着)
9 灰砂-ア	5Y4/2	シルト・粘土混細砂 (粘土ブロック・炭化物・植物遺体含む)	33 灰砂-ア	7.5Y4/2	シルト混中・粗砂 (小礫・シルトブロック含む)
10 灰	5Y4/1	細砂混シルト (粘土・粗砂含む 斑鉄)	34 灰砂-ア	5Y4/2	シルト混粗砂 (小礫わずかに含む)
11 灰	5Y4/1	細砂混粘土シルト (炭化物・植物遺体含む 斑鉄)	35 灰砂-ア	5Y4/2	中・粗砂 (シルト含む 小礫わずかに含む Fe沈着)
12 砂-ア	5Y3/2	細砂混シルト (粘土含む 粗砂わずかに含む 斑鉄)	36 灰砂-ア	5Y5/2	シルト～細砂 (ブロック状 炭化物わずかに含む 斑鉄)
13 砂-ア	10Y3/1	粘土シルト (有機物含む フシあり)	37 暗砂-ア	5GY4/1	粘土シルト・粗砂 (小礫あり Fe沈着)
14 砂-ア	10Y3/2	微砂混粘土シルト (中細砂・小礫含む 炭化物多く含む FeCo3)	38 砂-ア	10Y3/1	細砂混粘土シルト (ブロック状 中砂わずかに含む 炭化物含む)
15 砂-ア	7.5Y3/1	粘土シルト (炭化物含む FeCo3 斑鉄)	39 砂-ア	10Y3/1	粘土シルト・細砂の互層 (炭化物・植物遺体含む フシあり 斑鉄 土壌化)
16 灰砂-ア	5Y4/2	細・中砂混粘土シルト (粗砂・小礫わずかに含む)	40 灰	10Y4/1	細砂・シルトの互層 (微細炭化物含む フシあり)
17 暗砂-ア	2.5GY3/1	細砂混粘土シルト (ブロック状 炭化物・植物遺体含む)	41 砂-ア	7.5Y3/2	粗砂混シルト (小礫含む Fe沈着)
18 灰	7.5Y4/1	中・粗砂混粘土シルト (小礫わずかに含む 植物遺体含む 斑鉄)	42 暗灰黄	2.5Y4/2	シルト～中・粗砂 (上部攪拌 上方細粒化)
19 灰	10Y4/1	粗砂混シルト (粘土・小礫含む)	43 灰白	5Y7/2	中砂～小礫 (層状シルト含む フシあり 一部酸化)
20 灰	10Y4/1	細砂混シルト (粘土・粗砂・炭化物含む 斑鉄)	44 灰砂-ア	5Y5/2	細・中砂
21 灰	5Y4/1	細砂混粘土シルト (炭化物わずかに含む FeCo3)	45 灰	5Y4/1	粘土シルト・微砂の互層 (有機物含む 斑鉄)
22 暗砂-ア	2.5GY3/1	細砂混粘土シルト (炭化物含む 斑鉄)	46 灰	7.5Y5/1	粘土シルト・中・粗砂の互層 (炭化物・植物遺体含む フシあり)
23 暗砂-ア	5GY4/1	細砂混粘土シルト (炭化物わずかに含む 微細ブロック状 斑鉄 FeCo3)	47 灰	5Y4/1	粘土シルト (微砂含む)
24 灰	5Y4/1	微砂混粘土シルト (炭化物・植物遺体含む 斑鉄 FeCo3)	48 灰	7.5Y4/1	粘土シルト (微砂含む)

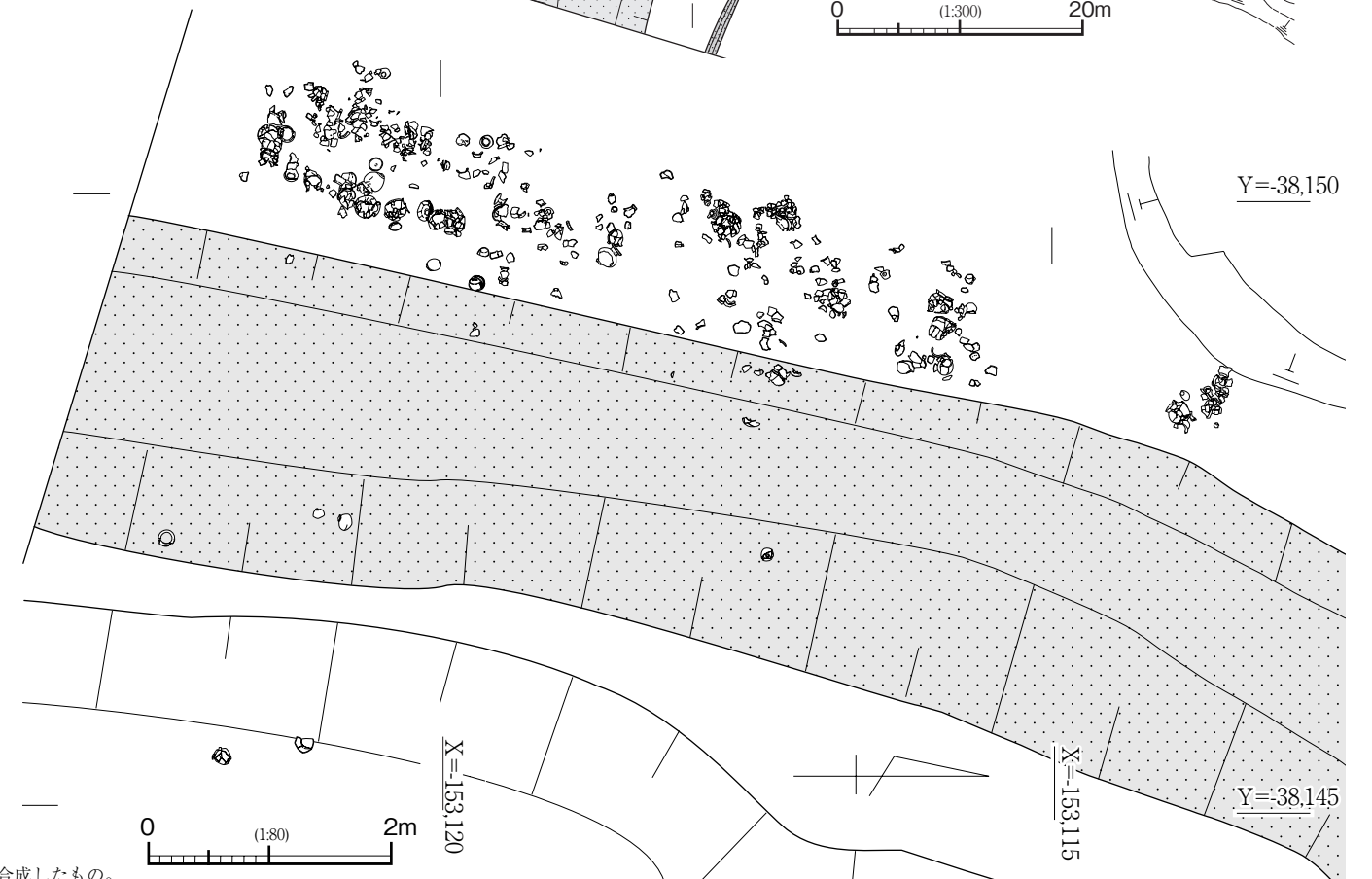
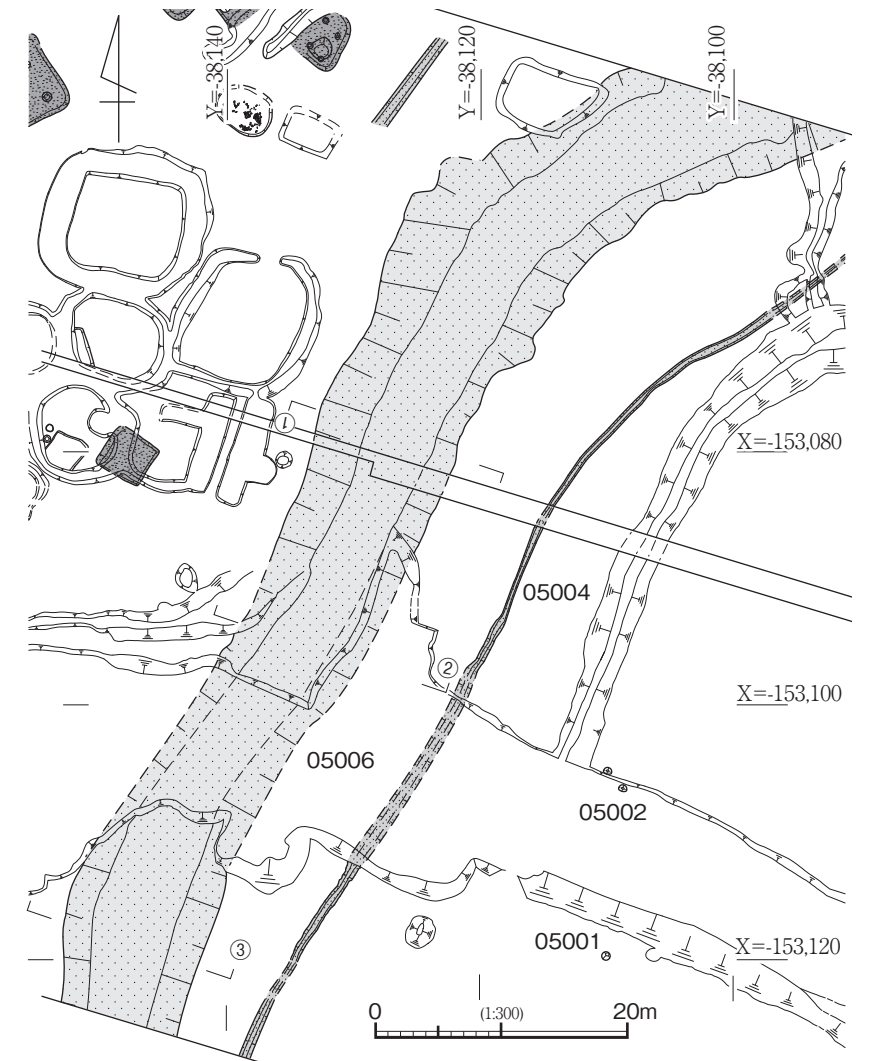


図 136 05006 流路・落込 断面 (2)、遺物出土状況

※遺構形状は第 5・2 面を合成したもの。  
ただし、第 5・2b(1) 面を表現するため、  
05308 溝のトーンは省略する。

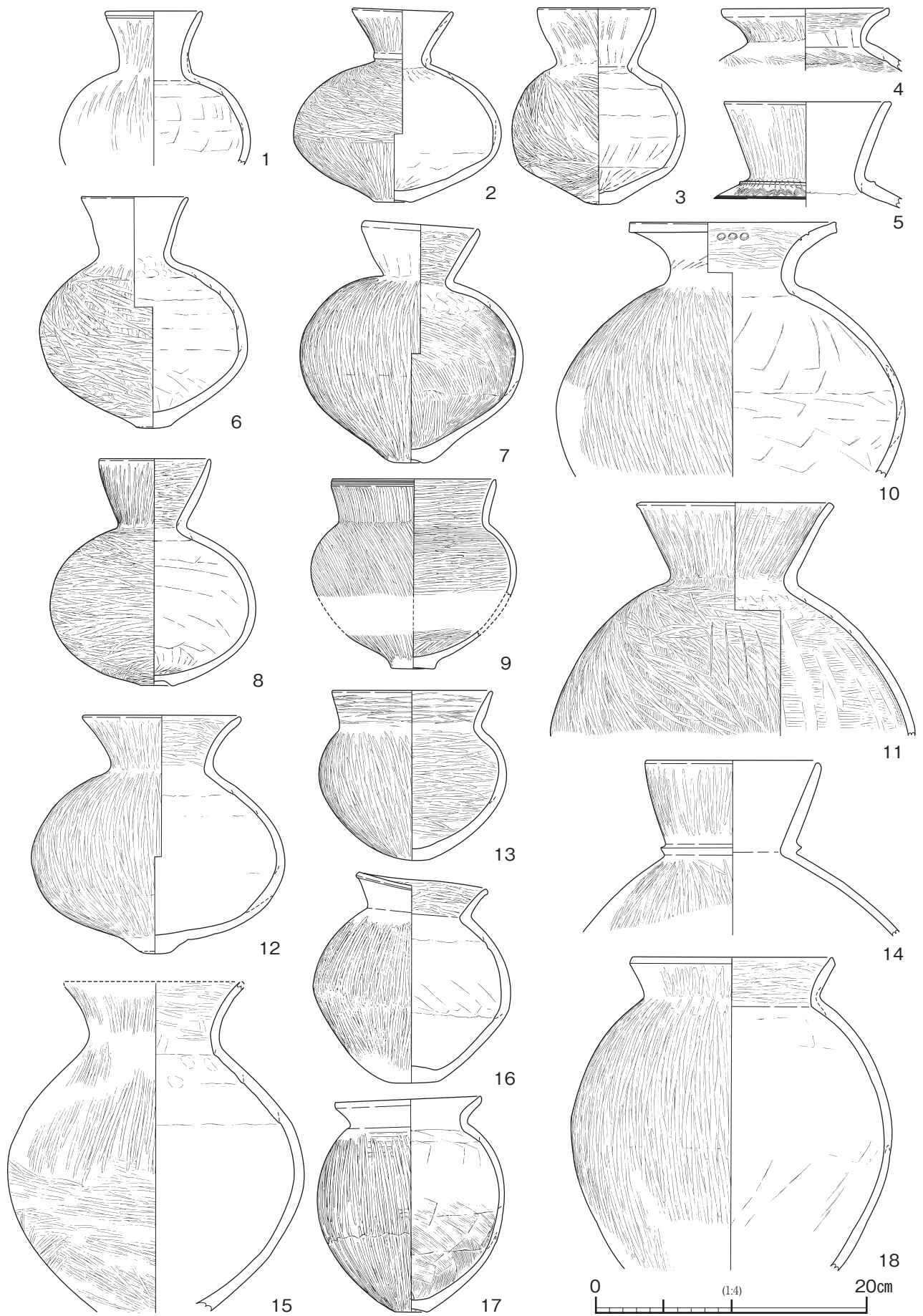


图 137 05006 流路·落込 出土遺物 (1)

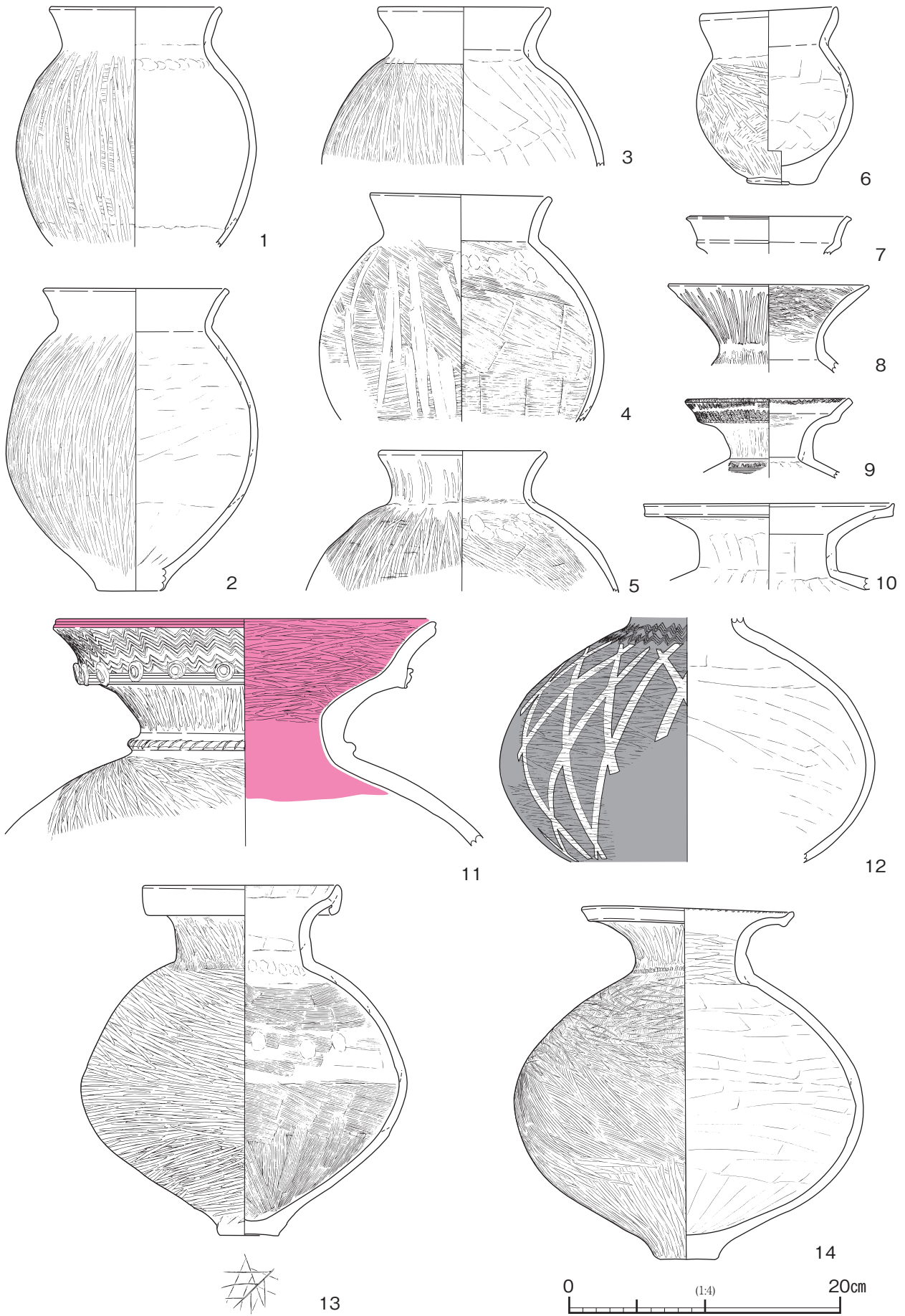


图 138 05006 流路·落达 出土遗物 (2)

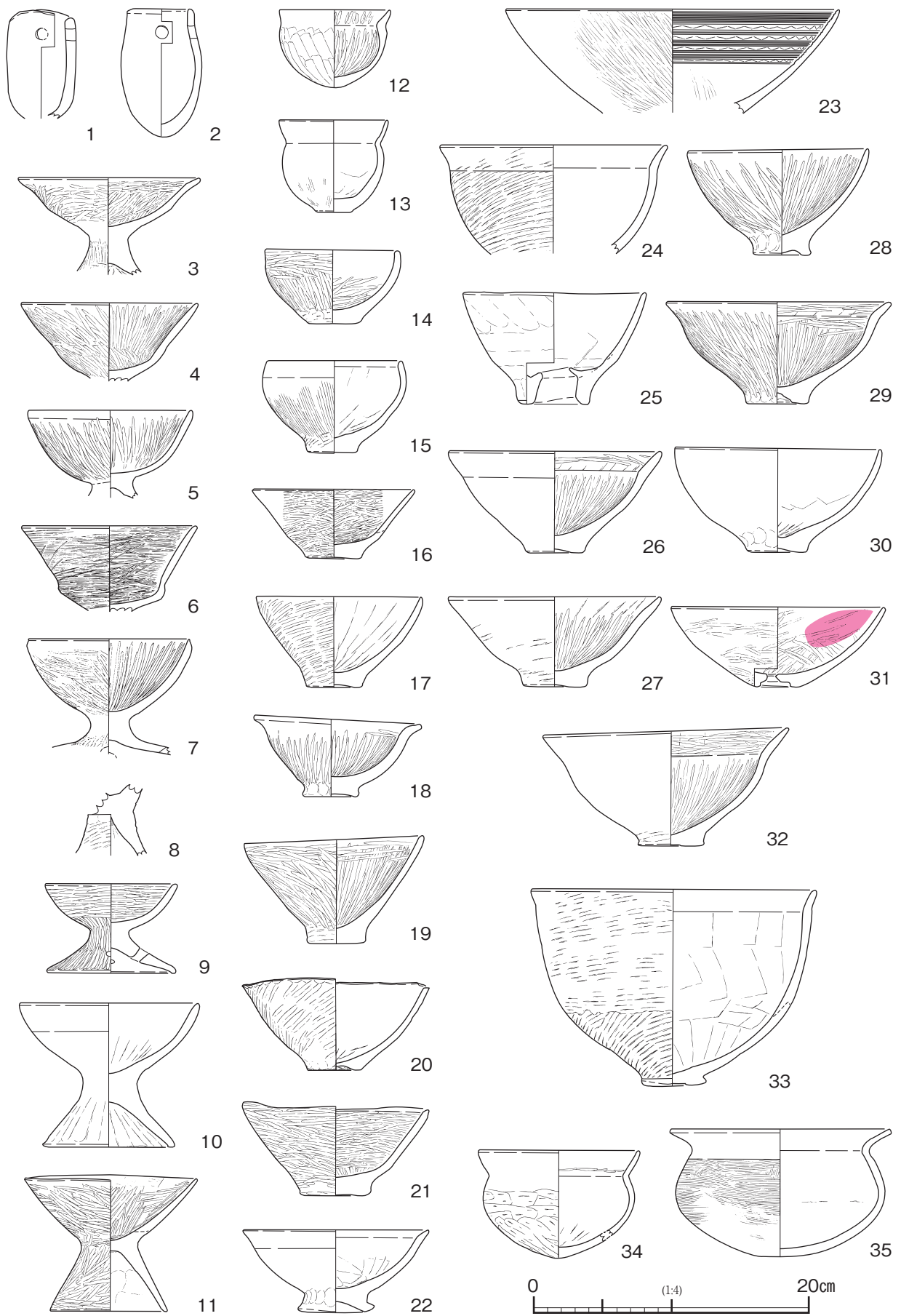


图 139 05006 流路·落込 出土遺物 (3)

と判断する。大量の炭化物が出土することから、土器の焼成土坑であり、失敗作の残骸を残したものでないかと推測する。しかし、明瞭な被熱の痕跡が確認できなかったこともあり、断定はできない。出土した遺物は高杯・甕・鉢・鉢・手焙形土器が挙げられ、甕は第V様式形のみであるが、高杯には庄内式期古段階のものが含まれる（図148、図版318～321）。

05008土坑は、調査区の中央付近、05056竪穴建物の西側に隣接する（図150、図版58）。遺構の南側は墳墓の周溝によって攪乱されるものの、一辺が約2.7 mの隅丸方形を呈し、深さ約60cmを測る（図

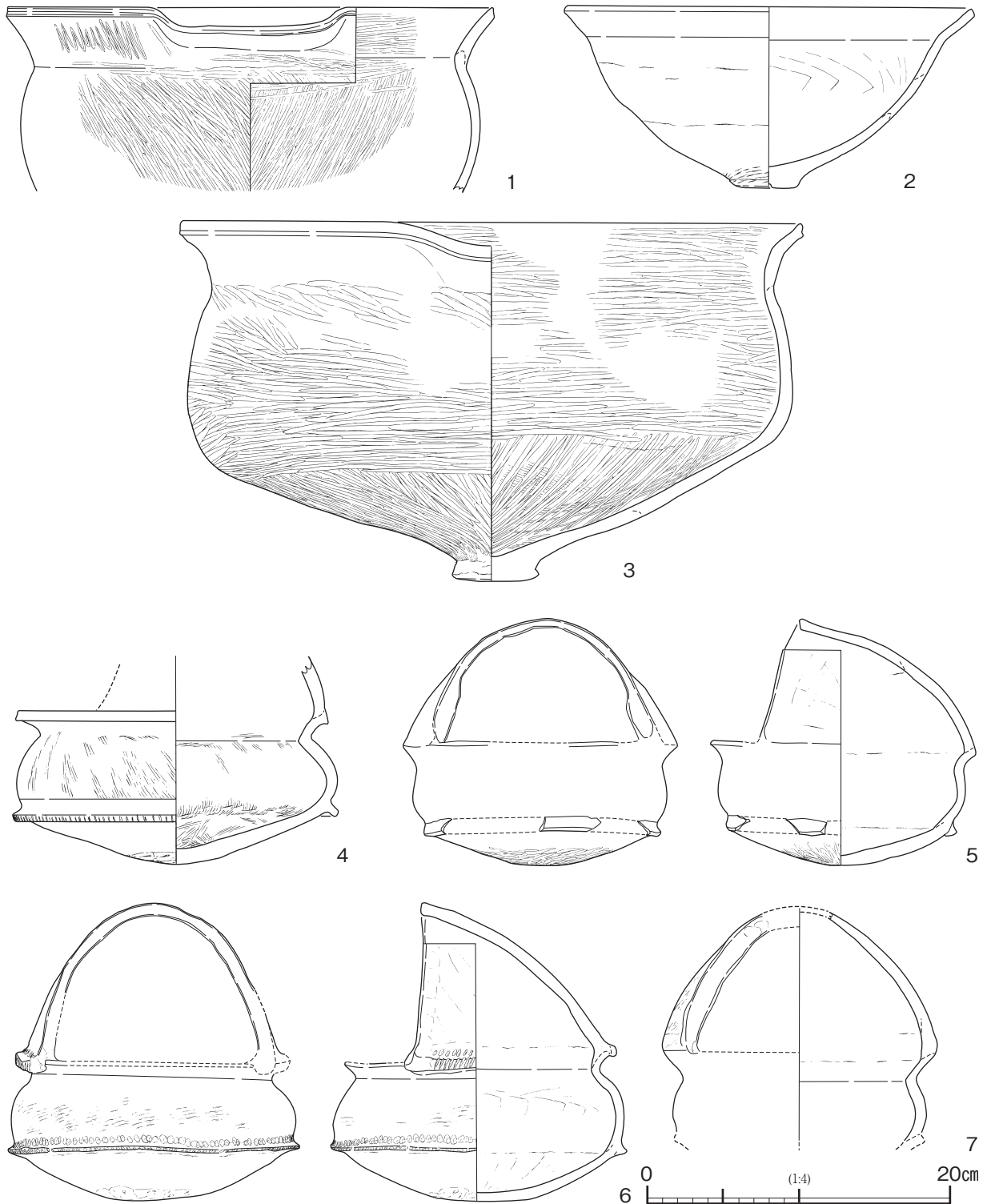


図140 05006 流路・落込 出土遺物（4）